石見銀山遺跡石造物調査報告書11

石見銀山

Iwami Ginzan Silver Mine Site

極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区

平成23（2011）年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

序

石見銀山遺跡は鉱山遺跡としては、アジアで初めて世界遺産登録された遺跡であります。また、平成22年度は充実した保護を目指すため資産の範囲を拡大しました。

鉱山活動が激減して久しい日本においては、鉱山そのものが忘れ去られようとしていましたが、石見銀山の世界遺産登録によって、現在は国内各地の鉱山遺跡にも光が当てられつつあります。

この世界遺産登録に向けて島根県と大田市では、平成９年から発掘調査や文献調査など様々な調査に取り組み、登録後においても引き続きその価値を高めるために調査を継続しているところであります。石造物調査もこの総合調査の一環として当初より取り組んでおり、これまでに銀山400年の歴史の姿を次々とかつ生々しく明らかにしてきました。

本書は、平成22年度に銀山の物流拠点である温泉津に所在する極楽寺と鉱山跡の中心である石銀地区で実施した石造物調査成果を中心に、平成14年度に実施しました銀山街道温泉津沖泊道周辺の石造物も併せて報告いたします。

極楽寺の調査では銀山地区と同じ福光石製の石塔が建立され、江戸時代後半の石塔を数多く確認することができました。また、石銀地区では大型の組合せ宝篋印塔が確認され、石銀地区に大型の石塔を造立することができる人物の存在などが想定できるなど、多くの貴重な成果を得ることができました。

この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに、本書が今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

平成23年３月

島根県教育委員会

教育長　今　井　康　雄

例　　言

1．本書は、石見銀山遺跡総合調査の一環として実施した石造物調査の報告書である。

2．調査した場所は以下のとおりである。

平成22年度　　極楽寺墓地（大田市温泉津町）
平成22年度　　石銀地区の石造物（大田市大森町）
平成14年度　　温泉津沖泊道周辺の石造物（大田市温泉津町・大森町）

3．調査は次の組織で実施した。

石見銀山遺跡調査活用委員会

町田　　章（前奈良文化財研究所所長）
井上　雅仁（島根県立三瓶自然館学芸GL）
大橋　泰夫（島根大学法文学部教授）
勝部　　昭（元島根県教育委員会教育次長）
黒田　乃生（筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授）
小林　准士（島根大学法文学部准教授）
高安　克己（島根大学名誉教授）
田中　裕子（オフィスタナカ代表）
中塩　　弘（DOWAホールディングス株式会社取締役）
仲野　義文（石見銀山資料館館長）
中村　俊郎（中村ブレイス株式会社代表取締役社長）
西村　幸夫（東京大学先端科学技術研究センター教授）
林　　秀司（島根県立大学総合政策学部教授）
原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校准教授）
村上　　隆（京都国立博物館学芸部保存修理指導室長）

事務局（平成22年度）

松本　岩雄（文化財課長）
若槻　真治（文化財課世界遺産室長）
間野　大丞（同企画員）
目次　謙一（同主任研究員）
中木紗友美（同嘱託）
川島　　均（同文化財GL）
林　　健亮（同専門研究員）
守岡　正司（同専門研究員）
角　　俊一（同主任）

石造物調査指導者

田中　義昭（島根県文化財保護審議会委員）　池上　　悟（立正大学文学部教授）

今岡　利江（島根県立八雲立つ風土記の丘）

調査参加者

現地調査

（石造物調査指導者）	田中　義昭	池上　　悟	今岡　利江				
（島根県教育委員会）	林　　健亮	間野　大丞	守岡　正司	目次　謙一	中木紗友美		
（大田市教育委員会）	中田　健一（大田市石見銀山課遺跡調査係長）	青木俊介（同主事）					
	野島　智実（同技師）	新川　　隆（同調査補助員）					
	尾村　　勝（同調査補助員）	松尾　賢二（同調査補助員）					
（立正大学考古学研究室）	村山　　卓	砂生　智江					
資料整理	高村　玲子	浅野　美貴	井上　伸子	福田　順子	岩谷　麻美		
	後地　亜衣						

4．調査においては下記の方々から多くのご教示・ご指導を頂いた。記して謝意を表したい。

今田善寿（大田市事業推進課）、大門克典（大田市石見銀山課）、鳥谷芳雄（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）、仲野義文（石見銀山資料館館長）、中村唯史（島根県立三瓶自然館）、濱田秩代（極楽寺）　（敬称略）

5．第５図は島根県教育委員会が作製した「石見銀山遺跡・銀山街道現況平面図」の一部を改変した。第17図は大田市が作製した「石見銀山遺跡平面図（石銀地区）」の一部を改変した。

6．実測図・写真・拓本等は石見銀山世界遺産センター（大田市大森町イ1597番地３）において保管している。

7．本書の執筆は目次に明記した。

本　文　目　次

第１章　調査の目的・対象・経緯 …… 1
第２章　石見銀山遺跡と温泉津の歴史
　第１節　温泉津の歴史 ……（新川） 3
　第２節　温泉津の寺社 ……（中木） 5
　第３節　小浜地区の概要 ……（中木） 10
　第４節　小浜地区の寺院 ……（中木） 11
第３章　極楽寺墓地の調査
　第１節　極楽寺の概要 ……（中木） 12
　第２節　調査の経過 ……（守岡） 12
　第３節　確認された石造物の概要 ……（守岡） 14
　第４節　墓地と石造物の配置 ……（守岡） 17
　第５節　各種墓石の様相 ……（守岡） 17
　第６節　極楽寺墓地調査のまとめ ……（守岡） 25
　第７節　総括 ……（田中） 25
第４章　温泉津沖泊道周辺の石造物
　第１節　調査の概要 ……（守岡） 29
　第２節　石造物の概要 …… 29
第５章　大田市大森町石銀地区周辺の石造物
　第１節　はじめに ……（林） 38
　第２節　石銀地区墓Ⅱの石造物 ……（林） 38
　第３節　石銀地区墓Ⅳの石造物 ……（林） 38
第６章　石見銀山遺跡の陶製墓標・燈籠
　第１節　調査の概要 ……（守岡） 43
　第２節　陶製墓標・燈籠等の概要 ……（守岡） 43
　第３節　まとめ ……（守岡） 45

挿　図　目　次

第１図　石見銀山遺跡の範囲
第２図　温泉津地区の主な寺社
第３図　温泉津地区の石造物分布図（１）
第４図　温泉津地区の石造物分布図（２）
第５図　極楽寺周辺地形図S＝1/1,000
第６図　極楽寺の石造物
第７図　極楽寺の石造物（１）S＝1/10
第８図　極楽寺の石造物（２）S＝1/10
第９図　極楽寺の石造物（３）S＝1/10
第10図　極楽寺の石造物（４）S＝1/10
第11図　極楽寺の石造物（５）S＝1/10
第12図　温泉津沖泊道周辺の石造物位置図

第13図　温泉津沖泊道周辺の石造物S＝1/10・1/20
第14図　温泉津沖泊道周辺の石造物S＝1/20
第15図　火伏観音の石造物S＝1/10
第16図　温泉津沖泊道周辺の石造物S＝1/10他
第17図　石銀地区の石造物位置図S＝1/500
第18図　石銀地区墓Ⅱの石造物S＝1/10
第19図　石銀地区墓Ⅱの石造物復元図S＝1/10
第20図　石見銀山遺跡大型組合せ宝篋印塔S＝1/20
第21図　石銀地区墓Ⅳの石造物S＝1/10
第22図　陶製墓標・関連品実測図S＝1/10

表　目　次

第１表　幕末期における寺社一覧
第２表　温泉津地区の石造物の概要
第３表　家数人数等の比較表
第４表　小浜地区の寺院
第５表　墓石銘文一覧表

写真図版目次

図版１　極楽寺
　　極楽寺東側墓地Aグループ
図版２　極楽寺東側墓地Bグループ（南から）
　　極楽寺東側墓地Bグループ（北から）
図版３　極楽寺墓地　第７図１　第７図２
　　極楽寺墓地　第７図14・15　第７図16
図版４　極楽寺墓地　第７図10　第７図６
　　極楽寺墓地　第７図９　第８図５
図版５　極楽寺墓地　第８図２　第11図３
　　極楽寺墓地　第11図６　第11図７
図版６　温泉津沖泊道周辺　副夷険碑周辺（第14図６～８）
　　温泉津沖泊道周辺　西田の石仏（第14図３）　降路坂の題目塔（第14図２）
図版７　温泉津沖泊道周辺　火伏観音
　　温泉津沖泊道周辺　舟形光背墓標（第15図10）　一石五輪塔（第15図28）
図版８　温泉津沖泊道周辺　沖泊石殿（第13図１）　松山の道標（第14図１）
　　温泉津沖泊道周辺　中村の題目塔（第14図５）　副夷険碑（第14図６）
図版９　石銀地区墓Ⅱ　第18図１　第18図２　第18図６　第18図10
　　石銀地区墓Ⅱ　近景
図版10　石銀地区墓Ⅱ　第18図11　第21図８
　　石銀地区墓Ⅳ　近景

第１章　調査の目的・対象・経緯

第１節　調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世)、さらには近代へと長期にわたって形成された遺跡である。石見銀山遺跡では開発から閉山にいたるまでに、繁栄期・停滞期・衰退期のあったことが明らかになってきているが、この歴史過程を遺物や遺構といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、さまざまな側面から鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、銀山の開発に関わった人々の信仰や葬送儀礼、社会の営みとその変遷を明らかにすることにより、それに資することを目的として実施している。

第２節　調査の対象

一概に石造物といっても①墓碑、石塔、石仏などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切り場など生産地・流通関連石造物、など多種多様なものが認められる。それら全てが石造物調査の対象となることは言うまでもないことであるが、現実には限られた時間・人員等の制約も多く、全てを調査することは困難である。

したがって、本石造物調査においては、上記の４つの区分のうち、埋葬関係の遺構群・遺物群の様相、すなわち墓地とそれを構成する墓石が、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱山労働者・職人・商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料であり、鉱山の盛衰（人口の増減等）がより直接的に反映されていると考えられるとの理由から、①の信仰関連石造物を主な対象として重点的に調査を実施し、先に挙げた目的に迫ることとした。

第３節　調査の経緯

石造物調査（墓石）は島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のために、昭和60年度に徳善寺跡などについて、天正から慶長年間の紀年銘が存在する墓石を中心に一部の確認調査を実施したことがその始まりである。

平成９・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を押えるため、紀年銘のある墓石の調査が重点的に進められた。墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、古い墓石の存在する地区は生活していた時期も古い可能性の高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の３つの調査を総合的に行うこととなった。

①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要な箇所を判断する材料を得るための分布調査。

②特徴的な墓地については構造や変遷を把握するための詳細な悉皆調査。

③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料について関連調査。

これら３つの調査のうち悉皆調査については、①銀山地区・大森地区に位置する、②群としてのまとまりが明確に把握できる、③アクセスが容易である、④調査環境が比較的よいなどの条件を満

たした墓地のうち、本遺跡の最盛期と言われている戦国時代から江戸時代前半の墓地を重点的に選び、継続的に調査する計画をたてた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵珖寺、西念寺、金剛院の悉皆的調査と分布調査が行われた。なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物保存対策調査や港湾調査、街道調査の際に実施されている。

平成22年度は温泉津地区で、古層の石造物がある程度まとまって残る浄土宗極楽寺（小浜（こはま））の悉皆調査を実施した。また、16世紀後半以降に石見銀山遺跡で使用される福光石の石塔を考える上で、その分布や周辺部の石造物の様相を確認するため、石見銀山遺跡周辺部の石造物の調査を実施した。

さらに、以前、分布調査を行っていた石銀地区（墓Ⅱ、墓Ⅳ）の悉皆調査を実施することとした。石銀地区は鉱山の中心の一つで、以前の調査は藪の中で行われ、現在の調査精度に合わせた調査を実施する必要があった。

［参考文献］

1　島根県文化財愛護協会1986『石見銀山関連遺跡分布調査報告』

2　島根県教育委員会他1999「城跡調査・石造物調査・間歩調査編」『石見銀山』第3分冊

3　島根県教育委員会他1999「民俗調査・港湾調査・街道調査編」『石見銀山』第6分冊

4　温泉津町教育委員会1999『1999　温泉津』

5　島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書1―妙正寺跡―』

6　島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2―龍昌寺跡―』

7　島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3―安養寺・大安寺跡・大龍寺跡・奉行代官墓所外―』

8　島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書4―長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地（河島家・宗岡家―』

9　島根県教育委員会2004『石見銀山街道―鞆ケ浦道・温泉津沖泊道調査報告書―』

10　島根県教育委員会2005『石見銀山街道―鞆ケ浦・沖泊集落調査報告―』

11　島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5－分布調査と墓石調査の成果―』

12　島根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書6―温泉津地区恵珖寺墓地―』

13　島根県教育委員会・大田市教育委員会2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書7―温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査（1）―』

14　島根県教育委員会・大田市教育委員会2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書8―温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査（2）―』

15　島根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書9―西念寺墓地（3）・安原備中墓・大光寺墓地―』

16　大田市教育委員会2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区　保存対策調査報告書（補訂版）』

17　島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10―金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物―』

第２章　石見銀山遺跡と温泉津の歴史

第１節　温泉津の歴史

石見銀山の歴史は大永年間、博多の豪商神屋寿禎による発見開発によって始まる。温泉津湊はその外港として、戦国時代以降大きく発展した。

「温泉」の地名については、平安時代の『和名類聚抄』にすでに「温泉郷」の文字が見え、温泉津を含む一帯が比定されているが、湊の歴史としては13世紀末、近郊に大家荘が成立した頃に始まるという。その後、温泉津を含む温泉郷は櫛島の櫛山城を拠点とする温泉氏により支配されたとされるが、その実態については明確ではない。

銀山開発初期の銀積み出し港は、馬路の鞆ケ浦、古柳などとされ、当初は温泉津が主要港ではなかったと言われている。しかし、温泉津沖泊に所在する恵比須神社は16世紀代に遡る古建築であることが明らかとなり、建立が、大永６（1526）年と伝えられることから、銀山開発初期段階ではすでに沖泊は港湾施設として機能していたことが指摘されている。

温泉津が港湾施設として資料等で確認できるのは、毛利氏が石見に進出し、石見支配の拠点の一つとしてからと言われる。

具体的には永禄４（1561）年、毛利元就が石見銀山の攻防及び、尼子氏攻略のため温泉津に吉川元春を進駐させ、銀山への兵糧運搬の準備をさせたことに始まり、次の年には石見銀山を完全掌握している。その後、銀山地内と温泉津には奉行が配置されており、温泉津にはさらに永禄13（1570）年頃に鵜丸城を築城している。毛利氏は、温泉津・沖泊の港湾機能の高さを重視し、温泉津・沖泊を一体的に整備しており、湾の入り口には鵜丸城の他に櫛山城、笹山城を配し、防御を固めている。

毛利氏による支配は、豊臣氏との銀山の共同管理時期を含め慶長５（1600）年の関ヶ原の戦いまで続き、この間、港湾施設としての基礎が整備され、銀の積み出し港、物資の搬入搬出の主要港として位置付けられている。また、軍事的・政治的拠点としての機能も強化され、毛利氏の重要拠点の一つとして港湾都市へと発展している。これと共に、銀山から降路坂を越え、西田を経て温泉津・沖泊へ至るいわゆる温泉津沖泊道も整備され、銀山への物資の大量輸送が温泉津を中継基地として行われるようになる。

石見銀山は関ヶ原の戦い後、いち早く徳川氏の直轄地となり、11月には徳川氏の代官頭である大久保長安が石見に着任し、翌慶長６（1601）年に初代銀山奉行となっている。この大久保長安の施策でも、温泉津は重要拠点と位置付けられ、さらに整備が進められる。銀の搬出こそ海上輸送の危険性から慶長９（1604）年には尾道まで陸送されるルートに変更されるが、その後も温泉津は銀山の物資の搬入・搬出港として重要な位置を占めており、慶長10（1605）年には、銀山と共に「地銭免除」の特権が与えられ、町場作りに一層力が入れられている。その結果、温泉津居住者も増大し、すでに毛利氏の支配下で出現していた問屋の数も増え、大消費地である銀山の外港として更なる発展をとげることとなる。実際慶長10（1605）年からの１年間だけで、益田・三隅から運ばれた灰吹き用の木炭の陸揚げが、14,000俵にものぼっている。こうした物資は、温泉津から温泉津沖泊道を通って牛馬で銀山まで運搬されている。

銀山の最盛期は慶長年間から寛永年間と言われ、この時期の産銀は年産40トンを超えている。その後産銀量の低下に伴い、銀山が徐々に衰退していくのとは異なり、温泉津では寛文12（1672）年以降、日本海西廻り航路の開拓・展開により、その寄港地となり、さらに北前船の出現と活躍によって、日本海航路の重要な寄港地としても急速に整備されていくことになる。町には北前船の物資を

扱う問屋や商家が立ち並び、延享2（1745）年には狭い温泉津の町中に40軒の問屋を数えるまでになっている。それぞれの問屋は取り扱う廻船が定められており「加賀屋」「越前屋」「越後屋」「丹後屋」など廻船の本拠地の国名を屋号とする問屋も多かった。しかし、問屋の数が増え、各問屋間の競争が激化すると、「抜け駆け」事件も起こるようになり、船表番所の申し渡しなど、問屋仲間の取り締まりも強化されるような事態となっている。

このように廻船が増加し、物流が活発になると、この流通システムに組み込まれる地場産業も開発・展開していく。温泉津では「温泉津丸物」という陶器生産が始まり、「はんど」と呼ばれる甕を主要製品とした日用雑器が商品として北前船ルートにのって19世紀中頃から大量に流通する。これらの日用雑器は「石見焼」と言われ遠方まで運ばれたが、当然地元の銀山にも流通しており、銀山の発掘調査では近世から近代の層でこの石見焼が数多く出土している。温泉津の特産品はこの他に瓦、福光石、石見半紙などが知られ、これらも北前船の寄港によって広く買積されていく。

このように、活況を呈した温泉津であるが、明治維新となり、近代化が進み、船も西洋式船舶の導入、鉄道の敷設など、流通にも近代化が訪れると、従来の北前船は衰退していく。温泉津の問屋も従来の問屋業が成り立たなくなり、一時は40軒を数えた廻船問屋も小売業や旅館業に事業形態を変え、急速に姿を消してゆくことになる。こうして明治以降、温泉津の町は新たな展開へと移行してゆくのである。

［参考文献］

温泉津町1994・95『温泉津町誌上巻・中巻』

温泉津町教育委員会1999『1999　温泉津』

島根県教育委員会2004『石見銀山街道―鞆ケ浦道・温泉津沖泊道調査報告書―』

第1図　石見銀山遺跡の範囲

第２節　温泉津の寺社

温泉津湊は戦国大名の争奪戦の対象となるが、永禄５（1562）年には毛利氏に支配され、流通の拠点としても町場の経済的機能が重視されるようになった。現在、温泉津地域（重要伝統的建造物群保存地区内）には８ヶ所に寺社があるⅰが、それらの多くは中世後期の創建や、改宗・再興という起源を持っており、当然、その後温泉津地域を支配した毛利氏と関わりがあったと考えられる。

中でも西念寺は開祖然休がその師の三休（波根長福寺主）とともに毛利元就の九州攻めに御伽衆として同行し、後々まで毛利氏の庇護を受けた。また、西楽寺は真宗寺院として天正４年（1576）の石山合戦に参戦しているが、この時期は毛利氏が石山本願寺と協調して織田信長に対抗していた時期にあたっている。両寺とも毛利輝元から諸役免除を受けており、当地の無縁所としても機能していたとされるⅱ。

毛利氏と関わりの深い寺院としてほかに禅宗海蔵寺がある。海蔵寺は現在の法泉町の谷奥にあったとされⅲ、毛利氏と尼子氏の銀山争奪戦において、永禄元年（1558）尼子氏に降伏した毛利方武将、山吹城主の刺賀長信が家臣高畑遠言とともに切腹したとされる寺院である。以後、海蔵寺は毛利氏と深く関わりを持ち、慶長９年（1604）、毛利輝元の要請によって毛利氏の萩移転とともに寺も萩へ移り、海潮寺と改称したというⅳ。近世期にも海蔵寺（史料によっては海蔵庵）が存在しているが（第１表）、これも中世の海蔵寺との関連で建立された寺と推測できるだろう。

近世に入ると村明細帳ⅴが作成されるようになり、寺社数も記録されている。それによれば、温泉津村では近世を通じてだいたい社３ヶ所、寺６ヶ所、庵４～５ヶ所、そして愛宕社という構成になっていた。これらは上述した毛利氏支配時期にすでに創建され、近世初頭には大久保長安から諸役免除を得ている寺社を中心に構成されている。さらに、幕末期の慶応３年（1867）にはこれらの寺社の他、近世に入って建立されたものや他の寺院に付随して建立されたものも含めて記した寺社書上帳ⅵが作成されており、より詳細な様子がわかる（第１表）。

なお、愛宕社は村明細帳では愛宕堂と記され、神社とも寺院とも別の扱いで、「朝暮鐘つき堂」と注記されている。これは愛宕社が当時の人々にとって特別な存在であり、より人々に密着した存在だったことを示すものだろう。

註

註ⅰ　『温泉津町誌　下巻』「第九章第一節　個別社寺誌」による。

註ⅱ　小林俊二「中世末の国際都市温泉津の成立」（『郷土石見』№34、1993）他。西楽寺の前身は正恩庵であったとされ（『温泉津町誌』他）、正恩庵宛の毛利輝元判物が西楽寺に残されている。また、西楽寺、西念寺のほか、小浜の西福寺も無縁所だったとされる。無縁所と戦国大名との関係については『温泉津町誌　下巻』「第四章第三節　津泊都市温泉津の無縁所」に詳しい。

註ⅲ　海蔵寺末寺の草庵が現在の西念寺の前身と言われている。（西念寺蔵の古記録による）

註ⅳ　『石見六郡社寺誌』（小林俊二編、石見地方未刊資料刊行会）

註ⅴ　木津屋文書や『温泉津町誌　資料編』所収の温泉津村明細帳を参考にした。村明細帳は村ごとに人口や家数、生業、役銀等を記して役所へ提出したもので、温泉津村では延享4年（1747）分を始め、８冊の村明細帳が確認されている。

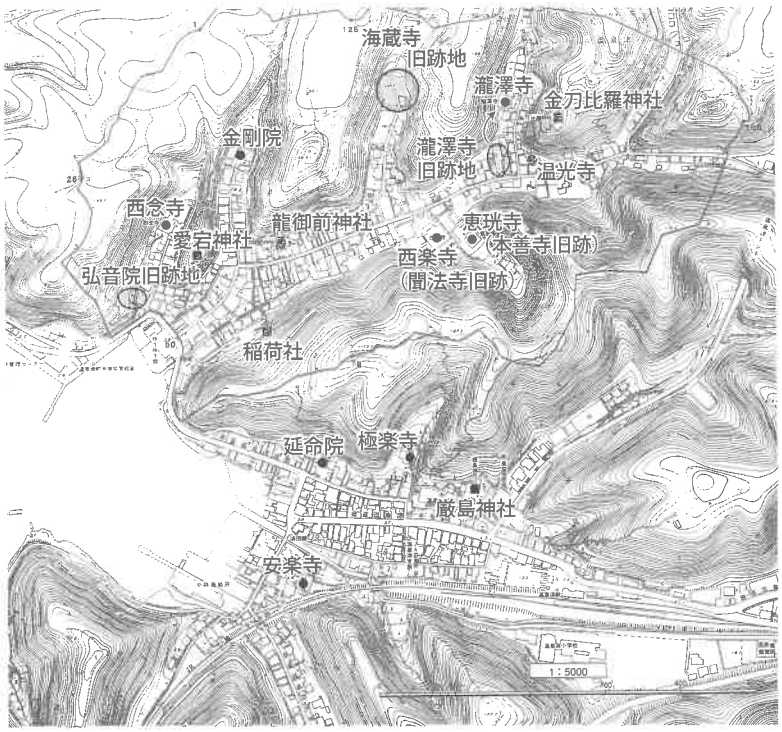
註ⅵ　木津屋文書（大田市教育委員会所蔵）。ただし、近世における温泉津村は温泉津町と沖泊、日祖、日村によって構成されるため、この史料中の寺社も温泉津町域以外に存在するものが含まれていると考えられる。

第１表　幕末期における寺社一覧（慶応３年　寺社書上帳より作成）

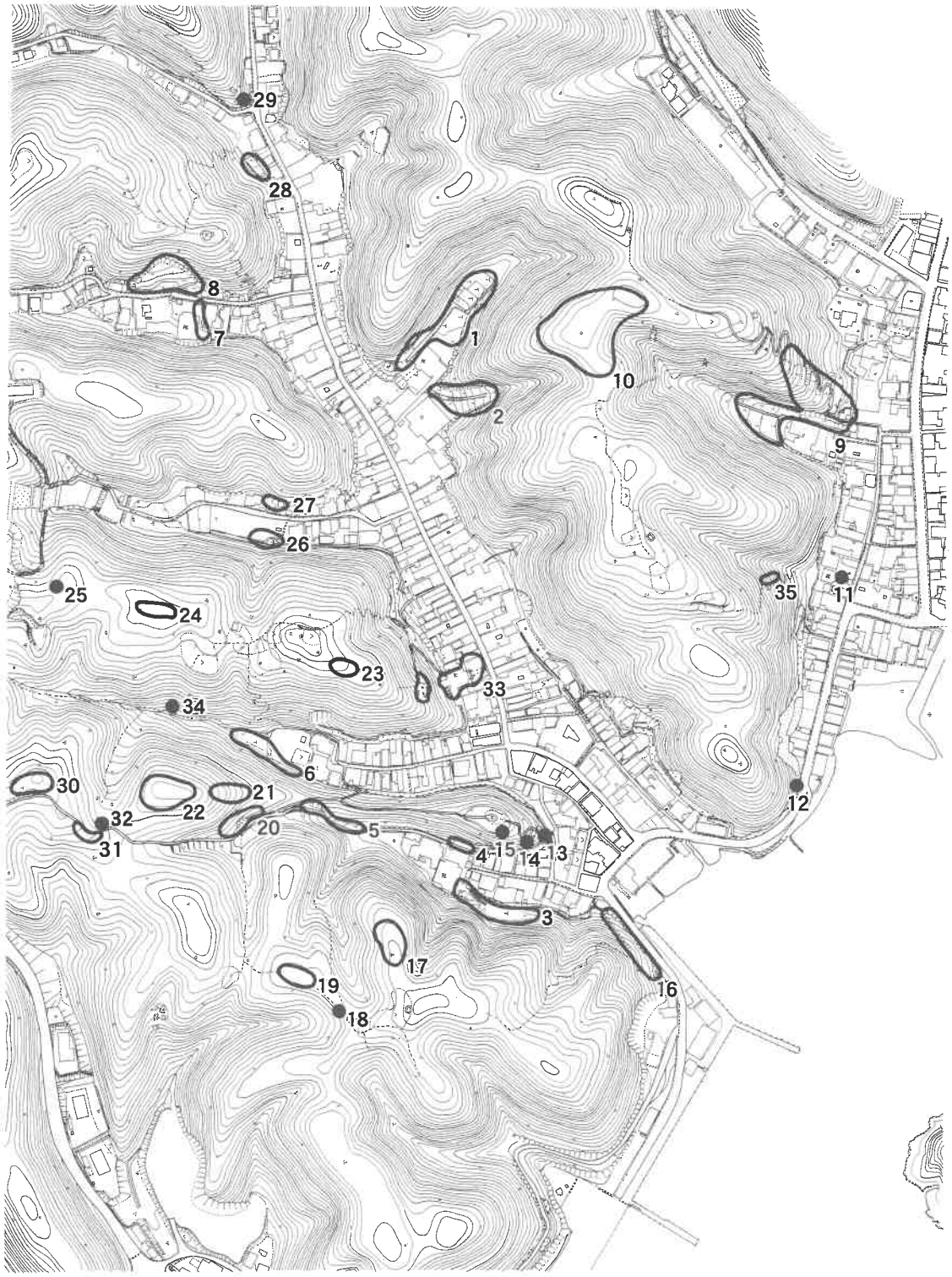
※1	寺社名	宗派・本末関係	境内地御免除	備　　考	起源他　※2
社	龍御前社		慶長年間		中世期か
社	恵比寿社		慶長年間		
社	稲荷社		慶長年間		慶長10年（1605）社殿建立
	金比羅社			村入会草山にあり	文政５年（1822）
	恵比寿社			岩の上に勧請	（沖泊ヵ）
	大元社			村持草山内の神森にあり	
	大年社			草山傍にあり	
◎	愛宕社		慶長年間	往古より朝暮に鐘突き	永禄元年（1558）
	三宝荒神			西念寺山林境内にあり	
寺	西楽寺	京都西本願寺末浄土真宗	元亀３年及び慶長年間		もとは禅宗寺院、大永元年（1521）真宗に改宗
庵	聞法寺	西楽寺末		西楽寺境内にあり	慶安（1648～51）頃ヵ
寺	恵珎寺	京都妙顕寺末法華宗	往古より除地及慶長８年		大永３年　（1523）
寺	本善寺	恵珎寺末		恵珎寺境内にあり	元文５年　（1740）
寺	西念寺	京都浄顕院末浄土宗	元亀年間及び慶長年間		永禄４年　（1561）
庵	弘音院	西念寺末		西念寺境内にあり	
庵	正念寺	西念寺末			（沖泊）
庵	法泉庵	西念寺末			
寺	龍澤寺	銀山町極楽寺末浄土宗	慶長年間		天正３年（1575）、大正11年（1922）現在地へ移転
	庵	龍沢寺持		村持地にあり	
寺	金剛院	紀州高野山正智院末真言宗	慶長年間		延元２年　（1337）
	地蔵堂				
	（岩窟）	千手観世音菩薩		西浜地岩穴に安置	
庵	海蔵寺	長州萩海潮寺末之波積本郷福城寺末禅宗			
	善一郎持寺	浄土真宗西楽寺より勤来	永禄３年及び慶長年間	温泉持主善一郎持	室町時代末期

※1　明細帳で社（3ヶ所）・寺（6～7ヶ所）・庵（4～5ヶ所）として挙げられている寺社と愛宕社。
ただし、法泉庵は19世紀以降の明細帳のみ記され、庵の内に入れられていた聞法寺は19世紀半ばより寺の一つに数えられている。

※2　『温泉津町誌　下巻』『温泉津 1999　重要伝統的建造物群保存地区調査報告』をもとにした。



第２図　温泉津の主な寺社（黒丸：寺院　黒角：神社）



第３図　温泉津地区石造物分布図（1）

第４図　温泉津地区石造物分布図（2）

第２表　温泉津地区の石造物の概要（温泉津・小浜）

群名	寺院との関係	上限	下限	概数	墓塔系					墓標系	その他		備　考
					一宝	一五	組宝	組五	無縫塔		地蔵	その他	
1	恵珙寺	文禄４（1595）	平成	388	18	11	24	3		280	5	舟形光背２、その他45	H17調査
2	西楽寺	宝暦８（1758）	平成	250						250			
3	西念寺			192			9	3		159	21		H20調査
4	西念寺			570	1	1	14		42	2	510		H18～20調査
5	西念寺	慶長18（1613）	大正	48		2	5		3	24	14	舟形光背２・その他６	
6	金剛院	元和３（1617）		85	2	1	5	2	8	59	8	笠付角塔	H21調査
7	龍澤寺	享保13（1728）		19					9		10		
8	龍澤寺			190						180	5	灯籠５	
9	極楽寺	慶長		471	8	7	31	5	27	350	43	舟形光背１・その他３	小浜地区
10	延命院			68			1			65	1	陶製墓標1	
11				6			1				5		小浜地区
12				2							2		小浜地区
13				6							6		
14				2			1			1			
15		慶長18（1613）		2				2					大久保長安逆修塔
16				30							30		
17	H屋・Y屋	文化	明治	40						40		花崗岩製１	
18		天保９（1838）		3			1				2		
19	N屋			10						10			
20		元禄13（1700）	明治44（1911）	13	1		5		1	6		花崗岩製１	H20調査
21			昭和12（1937）	12						12			
22		天正２（1574）	明治30（1897）	58		2	10			45	1		H21一部調査
23		明治13（1880）	昭和９（1934）	8						8			
24				29						29			
25				3				1		2			
26	海蔵寺跡		大正	22				1		20	1		
27	海蔵寺跡			10						3	6	陶製墓標１	
28	K屋・I屋	嘉永３（1850）		61			1			60			コンクリート塗装
29				6							5	石碑１	
30			大正５（1916）	130			3		1	120	6		
31		文化14（1817）	明治６（1873）	16		1	1			14			
32				4			3				1		H21調査
33	龍御前神社			7								灯籠６、鳥居１	
34				8	2	1	5						
35				4							4		小浜
36	延命院	宝暦３（1753）		59	1		1		8	44	1	陶製墓標２、線香立て１、その他１	
37	庵寺	天明４（1784）		355	3	2	3			341	6		
38		天保８（1837）	明治	15						15			
39		天保９（1838）		90	6		14	2	3	65			

※年代・数は確認できたもの

第３節　小浜地区の概要

小浜は温泉津湾の最も深い入り海に面した一帯とその西側の地域にあたり、北側に温泉津温泉で有名な温泉津の町並みが位置している。

中世以前の小浜については明らかではないが、温泉郷（温泉津・湯里・飯原・西田付近を一帯とする地域）のうちの温泉津地域に含まれ、大家荘の一部をなしていたらしい。その様子が明らかになるのは、戦国大名毛利氏が石見国を平定する16世紀後半以降である。

毛利氏は16世紀中頃より石見銀山を中心とする石見国東部の覇権を尼子氏と争い、永禄５年（1562）頃には実質的に石見国を平定、温泉津港を軍港と位置づけて、温泉津奉行を任命した。近年の研究では温泉津奉行が温泉津・小浜間の丘陵地に拠点を置いていた可能性が指摘されている。さらに毛利氏は永禄11年（1568）に当地に厳島神社を建立しており、温泉津だけでなく小浜の支配も積極的に進めていたようである。島津家久の伊勢参詣道中記である『中務大輔家久公御上京日記』には、天正３年（1575）６月、家久一行が小浜の宮の拝殿で休息を取ったことが記され、慶長５年（1600）には「酒役」が徴収されている（「子歳石見国銀山諸役銀請納書」）ように、この時期の小浜地域、特に厳島神社門前にまとまりのある町場があったことが想像できる。

近世に入ると波路浦など温泉津湾の西側一帯を含んだ小浜村が成立する。小浜村は温泉津村と一体的に把握されていたらしく、大久保長安が認めた温泉津の地銭免除は小浜村にも適用され、小浜浦は温泉津浦・波路浦・沖泊浦とともに「温泉津湊」と総称された。

寛永年間石見国絵図によれば、この時期当地には堀越口（現小林造船所付近）と宮前口（現厳島神社付近）の２箇所の口留番所が置かれている。口留番所は灰吹銀抜売りの監視等のほか、出入りする諸商人・諸荷物から役銀の取り立てを行うが、温泉津地域には海岸付近と町並み東限にそれぞれ船表番所と出口番所が置かれ、町場を挟んでいた。同様に、小浜においても堀越口と宮前口の間に家並みが続いていたと想定できるだろう。なお、寛永年間に同一地域に２箇所の番所が置かれたのは小浜、温泉津の他には大森・仁万のみであり、当地の発展が窺える。

慶長10年（1605）にはすでに屋敷は99軒（うち空き家29軒、波路浦は除く）あり、御公方炭蔵も置かれていた（「石州仁万郡小浜村御縄打屋敷帳」）。後年の写しであるが、慶長10年付で益田・三隅から小浜へ搬入された炭等の請取帳も残されており、近世当初より物資の水揚げ港であったとも言われている。

第３表は小浜・温泉津の家数・人数等と文政期における役銀の種類の比較である。両村とも人口

第３表　家数人数等の比較表

小浜		温泉津	
宝暦11年（1761）	家数139、人数632（男320、女312）、牛数37	天明７年（1787）	家数294、人別1289、牛11
文政５年（1822）	家数187（寺４、庵３、社家１、医師３） 人数938（男501内漁師52、女427） 牛33、馬２ 漁船33艘	文政５年（1822）	家数348、人別1644 牛６、馬２ 寺６、庵５、社３ ※文政13年　廻船12艘、漁船14艘 諸商人27（大問屋６、小問屋８、商人13）

※両村諸役銀の比較

文政５年（1822）	馬札役、生魚問屋役、鉄炮役、瓦役、糀室役、酒場役、水役（大工９、木挽５、石工３） 漁業関係諸役（和布役、沖立船役、磯釣船役、和布苅船役、海草役、鰯網船役、流網役）	文政13年（1830）	湯役、酒場役、瓦場二ヶ所役、糀室役、生魚問屋役、水役（鍛冶２、紺屋２、桶屋３、左官35、石工６、木挽６、大工11） 漁業関係諸役（和布刈役、海草役、沖立船役、他国漁船役、鰯網役、鰯網役、わかな網役、大敷役）

※各村明細帳による

増加しているが、家数に比して小浜村の方が漁業従事者の割合が高い。北前船の寄港地でもあった温泉津は繁華街であるためその他の職業に携わる者も多く、一方で小浜は港町として漁業従事者が多かった。また、小浜村には温泉津に比べて牛馬数が多く、上納諸役に馬札役が含まれていることから、運送業に従事する者がいたことがわかる。

そのほか、小浜村にも廻船の水揚げ荷を扱う問屋が存在していた。文政年間には他国船の積荷について温泉津との間で問屋利権をめぐる争論が起きている。結果として他国船は温泉津が受け入れ、小浜村は地船の積荷取り扱いのみと裁定されたが、これは小浜村問屋の商売が無視できないほど大きくなっていたことを示すものと言えるだろう。

近代以降、小浜村は明治22年（1889）に飯原村・上村と合併（大浜村）、昭和16年（1941）には温泉津町と合併する。大正7年（1918）には山陰線が開通し、小浜地内に温泉津駅が開業した。これによって小浜は温泉津温泉の玄関口となり、現在の町並みへと発展したのである。

[参考文献]
本多博之2010「毛利元就の温泉支配と輝元の継承」『日本歴史№743』
鳥谷芳雄2003「国絵図の中の石見銀山・領内表現」『古代文化研究№11』
村上直他編1978『江戸幕府石見銀山史料』雄山閣
村井祐樹2006「史料紹介　東京大学史料編纂所所蔵『中務大輔家久公御上京日記』」『東京大学史料編纂所研究紀要16号』
温泉津町1994・95『温泉津町誌上巻・中巻』

第４節　小浜地区の寺院

小浜の町並みにも、温泉津地域と同様に多くの寺社が建立された。

特に厳島神社は永禄11年（1568）に毛利元就が勧請したとされ、当時温泉津を支配下に置いた毛利氏が小浜地域も重要視していたことが窺える。近世には厳島神社の付近に小浜宮前口番所が置かれ、おそらくは町並みの起点となっていた。

文献資料によると、近世期には７ヶ所の寺・庵が確認できる（第４表）。このうち現在町並みに所在するのは極楽寺（16世紀末開基、後述）・延命院（建久７年／1196開基）・安楽寺（近世初頭の開基）の３ヶ寺であるが、安楽寺については真言宗寺院が後に浄土真宗に改宗したと伝えられ、慶長10年の段階では寺名が違っていた可能性もある。西福寺は温泉津正恩庵（西楽寺）、西念寺とともに戦国時代には無縁所とされ、永禄年間、毛利元就の九州出陣に御供を命じられたが、それを理由に参加していない。また近世には温泉津西念寺と本末関係にあり、西念寺古記録によれば17世紀末期には潰れていたが正徳３年（1713）に再建立、明治６年（1873）に廃寺となった。

これらのように文献資料で詳細の判明する寺院はいずれも中世～近世初頭の開基である。この時期は小浜の町並みの成立とも重なっており、その発展と関わりがあったと考えられるだろう。

[参考文献]
温泉津町1995『温泉津町誌』
村上直他編1978『江戸幕府石見銀山史料』雄山閣
島根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山石造物調査報告書９』

第４表　小浜地区の寺院

慶長10年(1605)	宝暦11年(1761)	文政５年(1822)
円明寺	寺四ヶ寺	寺四ヶ寺
延命坊	浄土宗極楽寺	浄土宗極楽寺
けいりう庵	真言宗延命院	真言宗延命院
神能庵	禅宗神の庵	禅宗神応庵
法寿院	浄土真宗安楽寺	浄土真宗安楽寺
西福寺(浄土宗)		庵三軒
極楽寺		浄土庵西福寺
		石上庵
		庭光庵

※慶長10年「石州仁万郡小浜村御縄打屋敷帳」
　宝暦11年・文政５年　小浜村明細帳
※いずれも波路浦等、町並み以外の地域を含む

第３章　極楽寺墓地の調査

第１節　極楽寺の概要

極楽寺（ごくらくじ）（山号無量山、院号證滇院）[1]は島根県大田市温泉津町小浜イ1099番地に所在する浄土宗寺院である。温泉津恵珖寺や西楽寺とは小浜との間の丘陵地を挟んでちょうど反対側に位置している。

天正２年（1574）専算和尚の開基とも、天正13年（1585）念誉和尚の開基とも言われるが、いずれにしろ戦国時代の創建であり、当初より現在地にあったとされる。

当寺には文献資料が残されていないため詳細は不明であるが、慶長10年（1605）８月の年紀を持つ「石州仁万郡小浜村御縄打屋敷帳」（文政２年写）によれば、

「三拾間拾間　一、壱反歩　　極楽寺」

と記され、小浜村の中で最も大きな敷地を持っていた。

温泉津にある浄土宗西念寺の古記録によれば、享保20年（1735）に本堂葺替を行い、西念寺住職が読経を行っているという記載がある。また、江戸時代の教育機関として小浜村にも何軒かの寺小屋が存在していたが、極楽寺でも幕末期の第23世住職精蓮社常誉上人が子どもたちを集めて手習いを行っていたらしい。

明治初期の信徒数は135人、明治後期の寺地は東西36間、南北35間、本堂は５間半四方と記録されている。

［参考文献］

温泉津町1995『温泉津町誌』
村上直他編1978『江戸幕府石見銀山史料』雄山閣

(1) 極楽寺濱田秩代氏のご教示による。

第２節　調査の経過

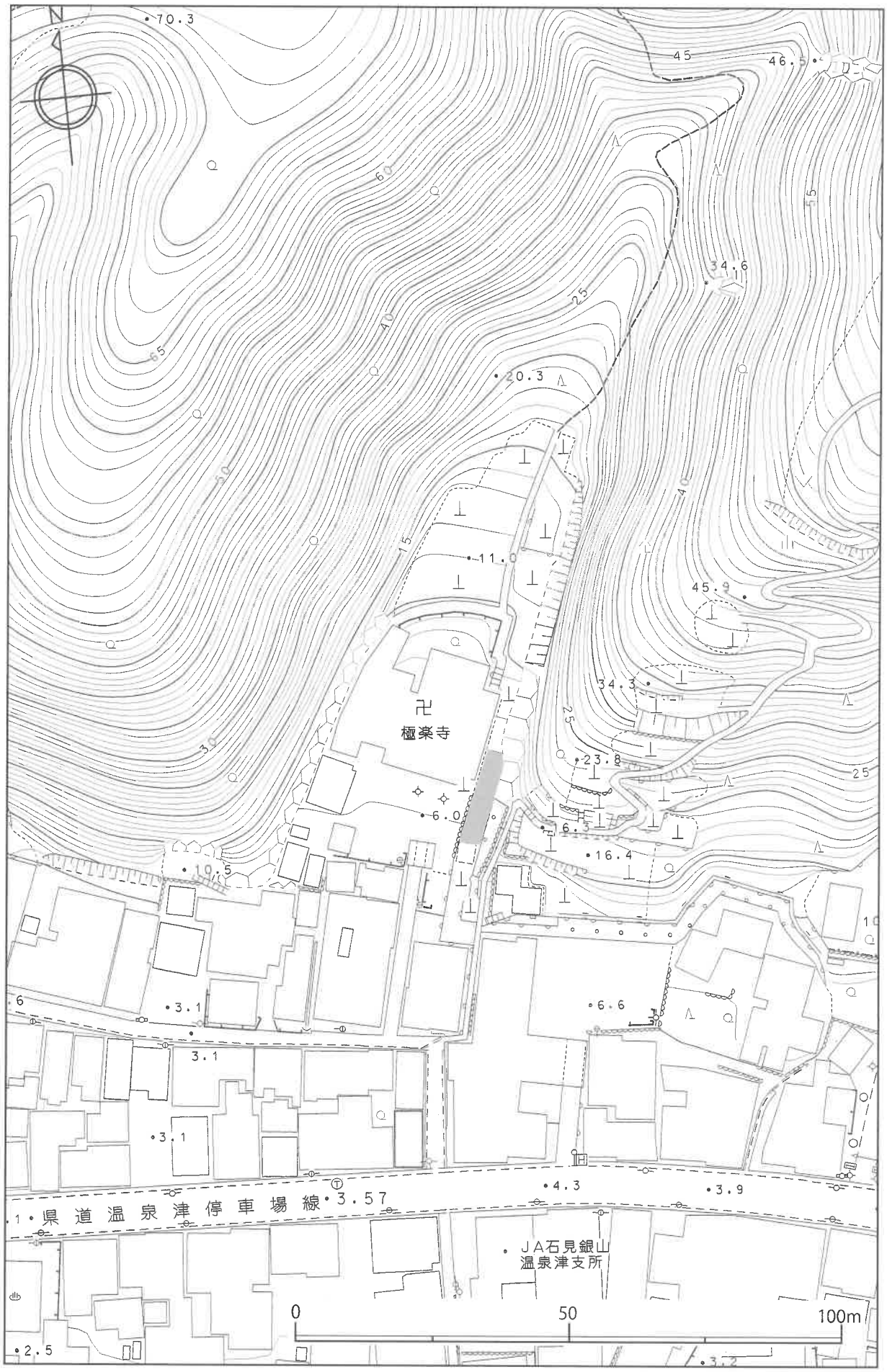
温泉津湾周辺の石造物は平成18・19年度に分布調査を実施し、概数や石造物の種別を把握してきた。その結果、温泉津・沖泊地区には概数で約3,500基の石造物があり、多くが墓標系の墓石であることが判明した。また、各寺院の墓地には墓標系の墓石を中心に存在し、数は少ないものの古層の墓塔系の墓石も含まれることが判明している。また、温泉津地区の石造物調査は悉皆調査を平成17年度から日蓮宗恵珖寺、浄土宗西念寺、真言宗金剛院の墓地で実施してきた。寺院の調査でも慶長期に遡る墓石や金剛院では14世紀末に遡る可能性がある宝篋印塔基礎も確認されている。

平成22年度の調査は６月11日の石造物調査指導会において、調査対象地は古層の石塔がまとまって存在し、個体数が適当な場所にすることを決め、極楽寺墓地の調査と石銀地区の墓石を対象として実施する方針が決められた。

温泉津地区には西楽寺や龍澤寺など石造物悉皆調査が未実施の寺院が存在している。しかし、分布調査により現在まで継続している墓地が多く、また、墓石が近年に再建されていることが多く、ほとんどが墓標系であることが判明していた。

一方、温泉津湾周辺に目を向けると、墓石の様相は同様であったが、小浜地区にある極楽寺には古層の石塔が集積されていることが分かっていた。これら集積されている墓石を悉皆調査することにより、小浜地区の様相把握、温泉津地区との比較が可能になることから、悉皆調査の対象を小浜地区の極楽寺墓地とした。

一方、石造物調査は温泉津地区の寺院の悉皆調査を中心に行っているが、調査当初に行った大田市大森町石銀地区の調査が長年懸案であった。平成９・10年度当時は竹藪のため十分な調査ができず、現在の調査基準で調査を行うことが課題であ



第５図　極楽寺周辺地形図（Ｓ＝1/1,000）

った。また、銀山地区では銀山川がおりなす谷部の寺院を中心に悉皆調査を実施してきた。しかし、石銀地区は発掘調査の成果などから江戸時代初頭には道路の両側に家々が並ぶ鉱山町として機能していたことが判明し、当時の景観や土地利用を考える上でも悉皆調査の必要性は説かれていた。今年度は大田市教育委員会により石銀地区の発掘調査が行われることとなり、調査環境が整った。

極楽寺墓地の調査は9月1日～9月3日には立正大学池上悟教授及び学生、田中義昭氏、今岡利江氏にも参加していただき、調査の効率化を図った。9月24日以降、周辺の古層の石塔など関連する調査を行った。

また、石銀地区の石造物調査も、同時に行った。面積が広いことから今年度は墓Ⅱと墓Ⅳを中心に行うこととした。9月に終了しなかった地点は、周辺の発掘調査に合わせ補足調査を実施した。以後、資料整理を行い、報告書作成を行った。

なお、石銀地区の石造物については、グルーピングを中心に既に一部が紹介されている（田中1999）。

［参考文献］

田中義昭編1999「石造物調査報告書」『石見銀山遺跡総合調査報告書　第3冊』

島根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺跡石造物調査報告書6―温泉津恵珖寺墓地―』

島根県教育委員会・大田市教育委員会2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書7―温泉津地区の分布調査と西念寺墓地悉皆調査（1）―』

島根県教育委員会・大田市教育委員会2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書8―温泉津地区の分布調査と西念寺墓地悉皆調査（2）―』

島根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書9―西念寺墓地（3）・安原備中墓・大光寺墓地―』

島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10―金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物―』

第3節　確認された石造物の概要

極楽寺墓地では今回の調査において、いくつかの形式の存在を確認することができた。ここでは、各墓石の様相について記す前に、極楽寺墓地において確認できた形式について、その概要を記すこととしたい。なお、基本的に石材は、地元石材である福光石（ふくみついし）である。

一石宝篋印塔

方柱状の石材を、上から相輪・笠・塔身・基礎と加工して造作された墓塔である。これまでの調査で石見銀山においては、この形式が中世末期から近世初頭に主体を占めることが明らかとなっている。極楽寺墓地においては、境内東側墓地の中に7基、北側墓地に1基確認された。

一石五輪塔

一石宝篋印塔と同様、方柱状の石材を加工するもので、上から空輪・風輪・火輪・水輪・地輪が造作されている。境内東側墓地に4基、東側尾根上墓地に3基が確認されている。

組合せ宝篋印塔

塔を構成する相輪・笠・塔身・基礎がそれぞれに造作されたもので、それらが組み合わされることにより完成する墓塔である。その特性ゆえに本来の組み合わせを維持しているものは多くないため、実数の把握は難しい。境内東側墓地に17基、北側墓地に4基、東側尾根上墓地に10基確認されている。

組合せ五輪塔

塔を構成する空輪・風輪・火輪・水輪・地輪がそれぞれに造作されたもので、それらが組み合わされることにより完成する墓塔である。境内東側尾根上墓地において5基が確認されている。今回は実測調査していない。

無縫塔

円柱状石材の先端部を尖らせ、下部を窄ませるように造作した部分と、円形あるいは方形の台座、または蓮台からなるものである。僧侶階層の墓塔として採用されたもので、極楽寺においても歴代住職の墓所として造作されたと判断される。境内東側墓地において23基、北側墓地に１基、東側尾根上墓地に３基確認されている。

地蔵

地蔵として造作したものである。境内東側墓地に28基、北側墓地に13基、東側尾根上墓地に２基ある。今回は実測調査していない。東側墓地では宝暦12（1762）年、天明６（1786）年銘がある。

円頂方形墓標

縦長の本体の頂部が丸く加工されたもので、本体の厚さに対して幅が上回る形態の墓標である。各墓地において確認される。境内東側墓地に65基ある。

円頂方柱墓標

縦長の本体の頂部が丸く加工されたもので、本体の厚さと幅がほぼ同じ大きさの墓標である。境内東側や北側の墓地、さらに東側尾根上墓地において主体的に確認される。今回は東側墓地のみ調査を実施し、95基ある。

平頂方柱墓標

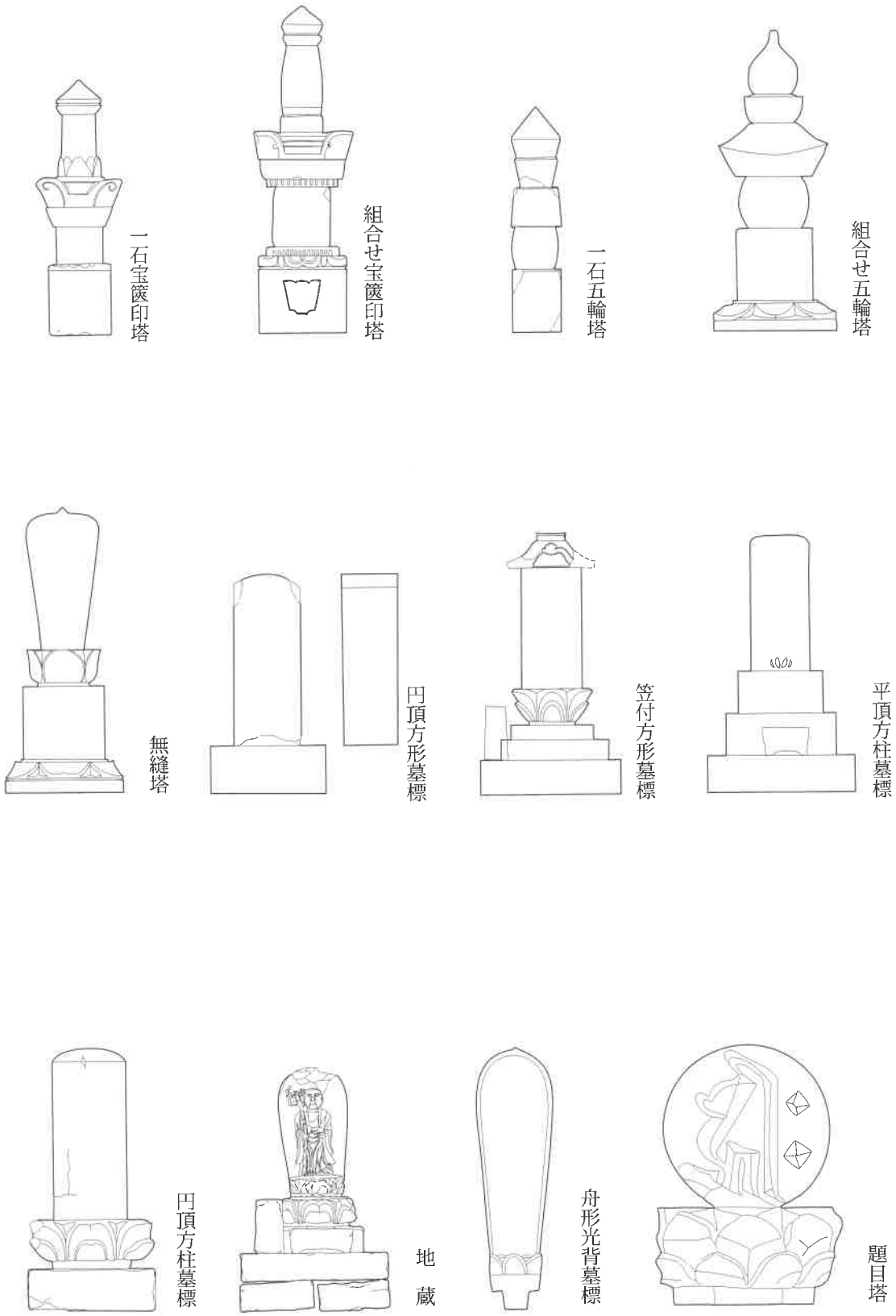
方柱状の本体上部が平らな形態の墓標である。境内北側の墓地において多数確認される。今回の調査では境内東側墓地のみ調査を実施し、５基を数える。２基は花崗岩製である。

突頂方柱墓標

方柱状の本体上部が丸みを持って突出する形態の墓標である。境内北側の墓地において確認されるが、今回の調査では対象外とした。

笠付方形墓標

厚さに対して幅が上回る長方形状の本体に、別個体の材を笠状に造作したものを乗せて完成する墓標である。境内北側墓地において確認されているが、調査の対象外とした。


一石宝篋印塔
組合せ宝篋印塔
一石五輪塔
組合せ五輪塔
無縫塔
円頂方形墓標
笠付方形墓標
平頂方柱墓標
円頂方柱墓標
地蔵
舟形光背墓標
題目塔

第６図　極楽寺の石造物

第４節　墓地と石造物の配置

浄土宗極楽寺は温泉津町小浜にあり、県道温泉津停車場線と併行して東西に走る小道北側に存在する。小道から約30m北側に山門があり、南に開く谷戸入口付近に位置する。谷戸は前面で幅40m、奥行き約80mを測る。尾根を挟んだ北側は温泉津地区にあたり、恵珖寺や西楽寺があり、谷の中央には尾根に向け道が続く。境内地は谷戸の中央に本堂を配置し、その西側に庫裡がある。谷奥に向け標高が高くなり、山門から本堂までは水平であり、北側の墓地は傾斜している。

極楽寺の墓地は本堂北側に①北側墓地、東側に②集積墓地（第５図網掛け部分）、東側の南向き斜面に③尾根上墓地が形成されている。①の北側墓地は緩斜面を方形に整然と52区画に区分され、近年の墓標が造立されている。近代の墓標に混じり、一石宝篋印塔１基、組合せ宝篋印塔４基、無縫塔１基、地蔵13基がある。地蔵は１区画に２基存在する区画が１個所、他は１区画１基である。

②の集積墓地は古層の墓塔に混じり、近世から昭和初年の墓標が集積されている。集積は大きく３個所に分けられる。南側（鐘楼側）からAグループとし、一番北側をCグループとする。

Aグループは整理番号（第５表参照）の17から20、200番台（214、215を除く）の55基が存在する。無縫塔は中央と後方に、円頂方柱墓標は前方に、地蔵は中央と後方に、宝篋印塔は中央に集積される。台座は無縫塔や地蔵の基礎になると考えられる。

Bグループは、整理番号の１から100番台（139は欠番）の173基が存在する。三段の雛壇上に加工段が造られ、そこに墓石が集められ、AからCの３つのグループでは一番多く墓石が集積されている。前方に宝篋印塔や円頂方柱墓標が整然と配置され、中央に円頂方柱墓標や円頂方形墓標、地蔵があり、後方には円頂方形墓標、地蔵、組合せ宝篋印塔の相輪が置かれている。

Cグループは整理番号の214、215、300番台の42基が存在する。Bグループとの境に215の円頂方形墓標があり、北側に題目塔の214が配される。214の北側に円頂方柱墓標が１個所に集積されている。さらに奥側に４～５列分の墓石を確認することができるが、現在は数量を確認することはできず、墓石数はさらに増加する。これらの墓石は側面を接するように集積されているうえ、一部はコンクリートなどで固められているので外側の一部しか計測や銘文を確認することはできない。

③の尾根上墓地は家ごとに斜面を加工し、墓標を造立している。最下段の平坦面に墓塔が集積され、一部は埋没している。一石五輪塔３基、組合せ宝篋印塔10基、組合せ五輪塔５基、無縫塔３基、地蔵２基が確認される。尾根上墓地の石造物は実測を行っていない。

第５節　各種墓石の様相

極楽寺墓地で確認できた石塔は12種類に及ぶ（第６図）。以下、個別に様相を述べる。

一石五輪塔は東側墓地に４基、東側尾根上墓地に３基の計７基ある。第７図（１）はAグループにあり、空風輪を欠損する。各部位の幅が21cmで、地輪がやや縦長である。（２）はBグループにあり、空風輪を欠損する。地輪は正方形に近い。（３）、（４）はBグループにある。（３）は空風火輪、（４）は水地輪で分かれているが元は同一個体の可能性がある。両者を接合すると高さは約54cmを測る。一石五輪塔からは銘文は確認できなかった。

一石宝篋印塔は東側墓地に７基、北側墓地に１基、計８基確認された。（５）、（７）、（８）はAグループで、他はBグループである。（６）や（９）は組合せ宝篋印塔基礎の上に置かれ、本来は別個体である。（10）は蓮弁を持つ基壇を伴う。紀年銘は基礎に刻まれ、（５）と（８）に確認できる。（５）が慶長14（1609）年、（８）が万治２（1659）年銘で、一石宝篋印塔の造立年代の１つの指標と

なる。（8）は基礎が縦長になり、新しくなるにつれ基礎が縦長になるというこれまでの研究状況にあう。（9）、（10）の基礎も縦長で、上部の反花座が簡略化され、新相である。相輪は全て上部が欠損している。下部には請花が表現されている。

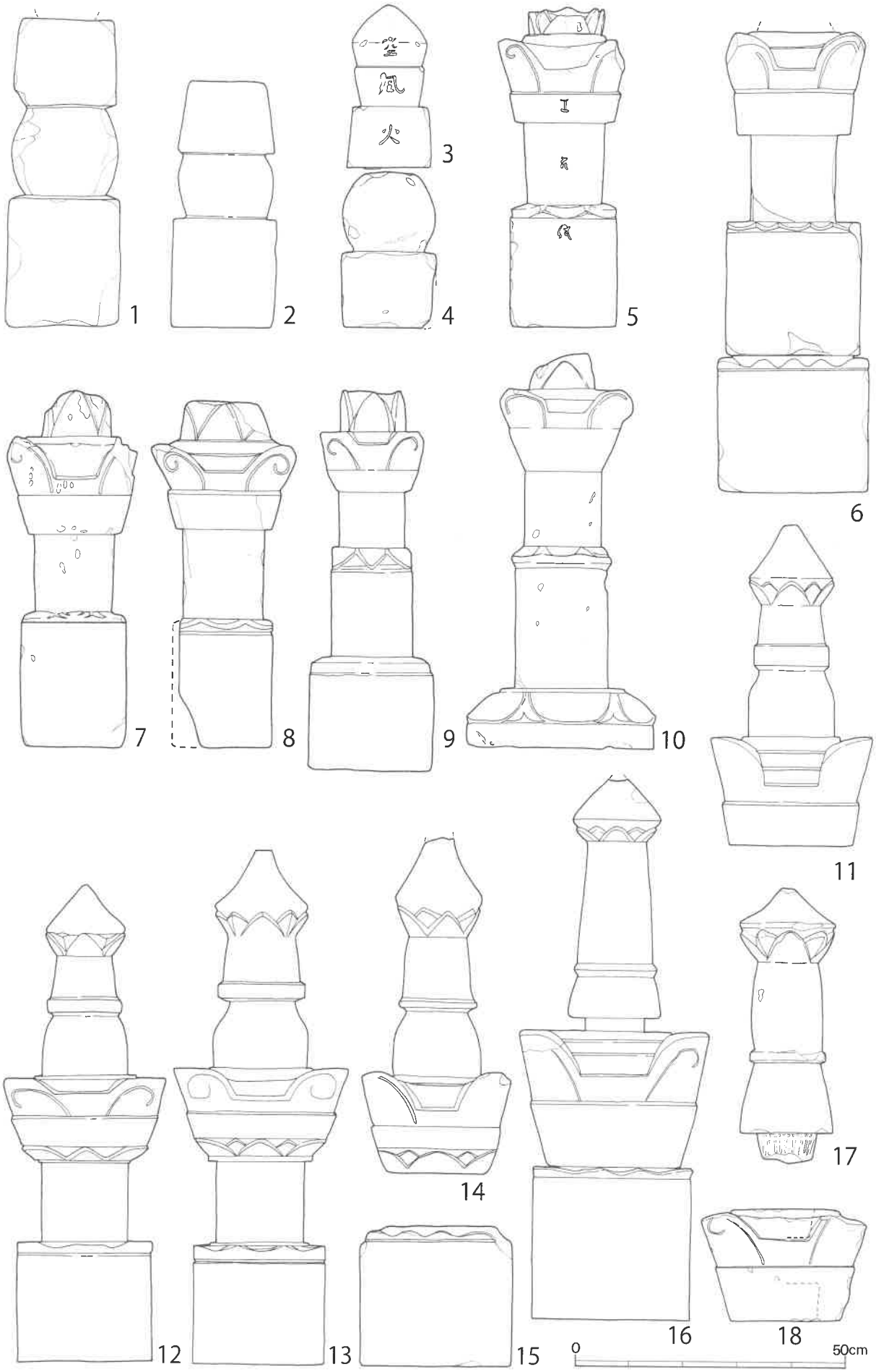
組合せ宝篋印塔は東側墓地に17基、北側墓地に4基、東側尾根上墓地に10基、計31基確認されている。第7図（17）、（18）、第8図（3）、（4）がAグループで、他はBグループである。各部位が別造りのため本来の組合せや数量を確認することは難しい。わずかに相輪が笠にセットされた状態で確認できるものがあり、本来の組合せの可能性が想定できる。**基礎**は（6）や（9）にも確認できる。紀年銘はなく、時期は判断できない。しかし、上部の反花座が簡略化され、正面の格狭間表現や縦蓮子の消失から新しい様相を見て取れる。**塔身**の残存状況は悪い。方形の石材であり転用される比率が高く、残存しにくいと思われる。笠は全て軒下の縦蓮子が消失しており、蓮弁を持つものと何も表現しないもの、に2分される。蓮弁を持つものは間弁を表現するもの（13、14）と表現しないもの（12）がある。隅飾り内側に表現された線刻の輪郭は先端が大きく蕨手状に巻き込むものが多く、（11）は線刻の輪郭は表現されていない。隅飾り間に表現された段級数は二段が基本であるが、三段（16）も存在する。規模に関しても第7図（14）、（18）、第8図（3）、（4）は小型である。**相輪**は先端の宝珠と請花、九輪部、下部の請花と伏鉢からなる。①宝珠の下に蓮弁の請花を持ち、素面の九輪部の下端に請花を表し、受鉢を造作するもの（第8図2）、②宝珠の下に蓮弁の請花を持ち、素面の九輪部の下端と受鉢の間に突帯を造作するものに2分される。ほとんどが②類であり、突帯の位置や相輪全体の長さにより細分ができる。①と②では表現の簡略化から②が後出と想定される。これらの様相を龍昌寺跡の調査成果から考えると極楽寺の組合せ宝篋印塔は慶長6（1601）年以降の造立と推定できる（島根県2002）。（5）は組合せ宝篋印塔の基礎の可能性も考えられるが、表面には戒名が刻まれている。上部は長さ35cm、幅27cm、奥行き23cm、下部は長さ46cm、幅40cm、奥行き30cmを測る。

無縫塔は東側墓地に23基、北側墓地に1基、東側尾根上墓地に3基の計27基が確認されている。全ては実測しておらず、第10図（1、2）が東側墓地Bグループ、（3）～（8）がAグループである。

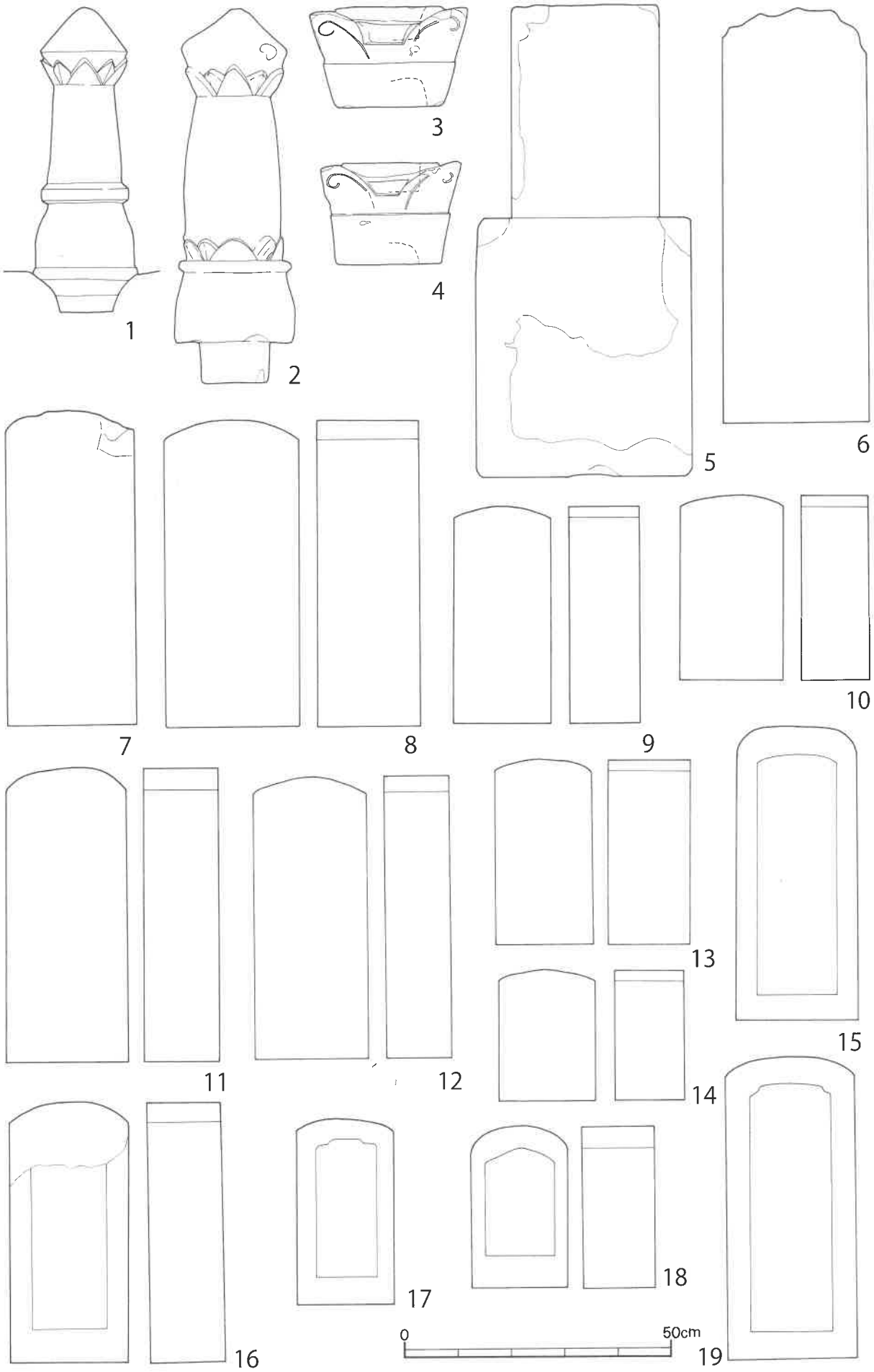
無縫塔の基礎は方形の台座（1、2、5、7、8）と蓮弁を伴う台座（3、4、6）がある。蓮弁を伴うものでは二段の蓮弁（3）と一段の蓮弁（4、6）がある。台座と塔身が本来の組合せかは不明である。塔身では（7）は円柱状に近い。頂部は扁平なものや三角形に近いもの（7）など形態差は大きい。紀年銘では（1）が嘉永2（1849）年、（8）が明治5（1872）年である。その他に寛政11（1799）年、文政11（1829）年がある。

円頂方形墓標は東側墓地のA、Bグループに存在するが、実測はBグループのみで行った。正面に枠囲いがあるものとないものがある。枠囲いは上部に屈曲をもち一段広がるもの（17、19）、さらに中央が突出するもの（第9図1）、上部が三角形を呈するもの（18）、単純なもの（15）に分かれる。規模では高さ74cm、幅27cmの大型（6）、高さ48～58cm、幅21～25cmの中型（7、8、11、12、15、16、19、第9図1）、高さ24～38cm、幅18cm前後の小型（9、10、13、14、17、18）に分かれる。小型品はさらに14が高さ24cmと小さく、細分できる可能性もある。戒名はほとんどが解読できないが、（9）に「妙法」、（10）に「釈」がある。前者は日蓮宗、後者は浄土真宗であり、何らかの理由で浄土宗の極楽寺に移動していることが分かる。また、小型の墓標に「釈」戒名があり、大森地区の安養寺で見たように小型の円形方形墓標が浄土真宗で多用されていることに共通している（島根県2003）。

紀年銘には（16）が宝暦13（1763）年、（12）が



第７図　極楽寺の石造物（1）（Ｓ＝1/10）



第８図　極楽寺の石造物（2）（Ｓ＝1/10）

安永５（1776）年、（18）が寛政３（1791）年、（11）が文化３（1806）年、（13）が天保５（1834）年、（15）が嘉永２（1849）年、（９）が文久２（1862）年、（14）が明治12（1879）年、（８）が昭和4（1929）年がある。銘文のみの調査では整理番号（211）が万治３（1660）年がある。ただ、全体の傾向からするとやや古すぎるので検討を要する資料である。使用期間は整理番号（159）が寛延４（1751）年、最新は（８）の昭和4（1929）年の178年間である。

10年間ごとの造立数は1750年代３基、1760年代１基、1770年代２基、1790年代３基、1800年代４基、1810年代３基、1820年代３基、1830年代８基、1840年代３基、1850年代５基、1860年代２基、1870年代５基、1880年代１基、1890年代１基、1900年代３基、1920年代１基と1830年代の造立が多い。

第11図４はCグループの南端に位置し、単独で存在する。三段の基壇上に本体がある。本体は幅18.5cm、奥行き12.5cm、高さ47cmを測る。右面に宝暦３（1753）年銘がある。なお、正面は山側を向いている。

円頂方柱墓標は東側墓地や北側墓地、東側尾根上墓地で確認できる。東側墓地ではAからCグループの全てに存在し、極楽寺墓地では通有の形態である。代表的なもののみ実測調査を実施した。

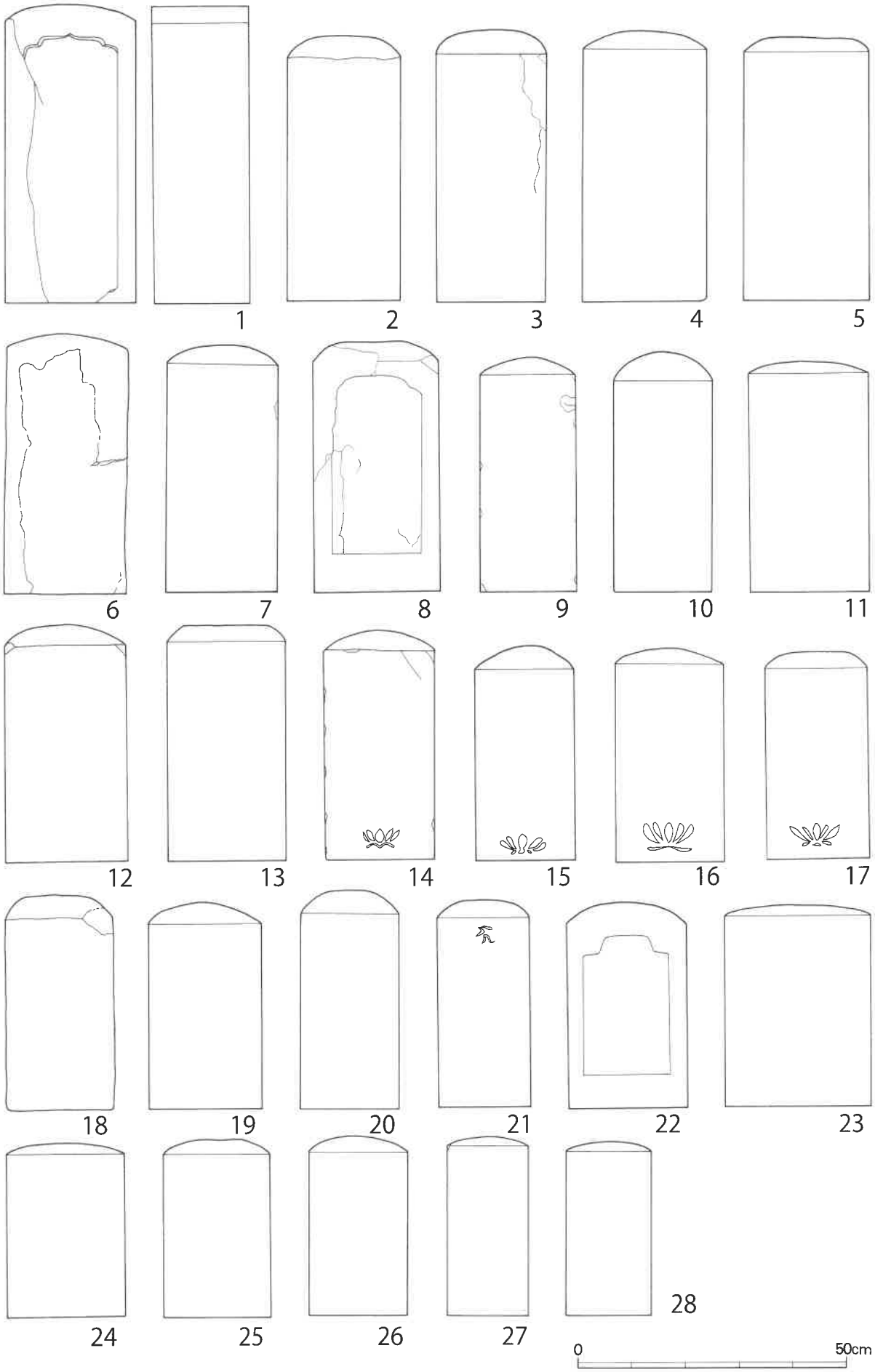
正面に枠囲いがあるもの（８、22）、下部に蓮弁を持つもの（14～17）がある。頂部形態も四隅から中央に向け丸くなるものを基本とするが、正面と裏面は垂直に立ち上がり左右面からのみ丸みをもつ２種類がある。（13）は頂部が削られ平らになり、本来はもう少し丸みがあったと考えられる。規模は高さ32～49cm、幅15～27cmのなかで、漸移的に変化する。幅は（23）が27cmとやや幅広で、他は24cmまでである。

戒名はほとんどが剥離し読めないが、（３）が「妙法」、（４、13～17、27、28）が「釈」、（５、９、20）が「誉」が確認できる。

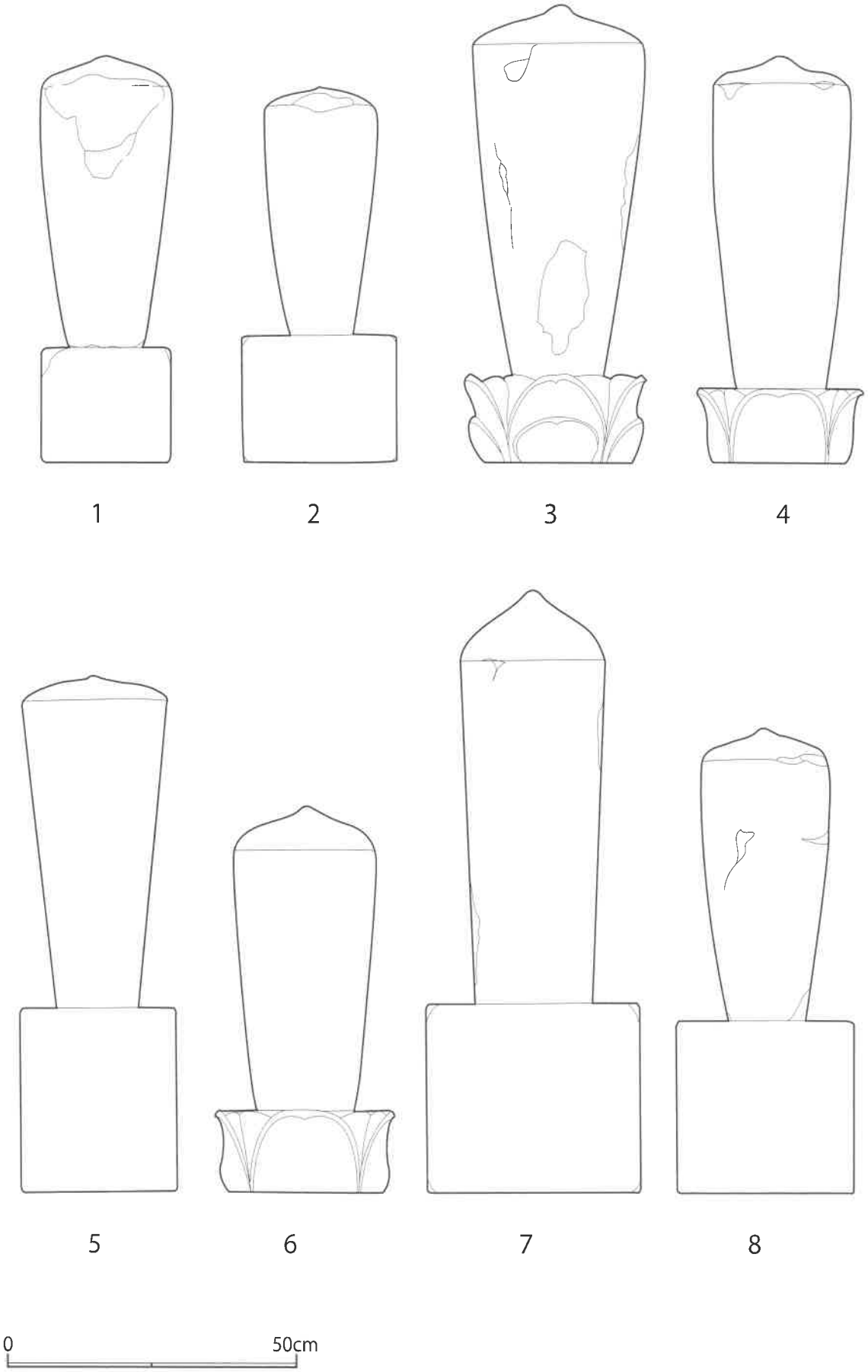
紀年銘には（22）が明和元（1764）年、（19）が文化２（1805）年、（８）が文政10（1827）年、26が天保６（1835）年、（２）が天保８（1837）年、（10）が天保８（1837）年、（21）が天保11（1840）年、（16）が弘化２（1845）年、（28）が嘉永４（1851）年、（20）が明治10（1876）年、（4）が明治19（1886）年、（27）が明治23（1890）年である。銘文のみの調査では最新は整理番号（85）の大正12（1923）年であり、使用期間は159年間である。

10年間ごとの造立数は1760年代１基、1790年代１基、1800年代３基、1810年代１基、1820年代１基、1830年代４基、1840年代５基、1860年代２基、1870年代５基、1880年代４基、1890年代２基、1920年代１基である。1830年代から40年代、1870年代から80年代の造立数が多い。

その他の石造物として第11図（１）は舟形光背墓標である。墓標の高さは90cm、幅39cm、奥行き19cmを測り、裏面は中央に稜線がある。正面は剥離しているが、枠囲いが確認できる。下部には間弁を伴う蓮弁表現がある。下部が幅広で、頂部に向け幅を減ずる。基礎は高さ16cm、幅58cm、奥行き16cmを測り、高さがある。石見銀山遺跡で確認されている舟形光背墓標は上方に向け幅を広げる形態であり、やや様相が異なる。一方、枠囲いや間弁を伴う蓮弁表現など古層の表現を伴っている（池上2010）。（２）は上部が欠損しているが高さ54cm、幅33cm、奥行き33cmの直方体の題目塔である。元高は不明であるが、正面に「南無阿弥陀佛」と刻まれている。石材は緑色を呈する。（３）は題目塔である。Cグループの南に位置する。上部は直径24cm、厚さ10cmの円形の石材に阿弥陀種子であるキリークが深く刻まれている。各部材は別造りで、円形石材は基壇に９×10cm、深さ0.5cmの方形の窪みを掘り、そこに置かれている。台座は高さ14cmで、周囲には二段の蓮弁が表現されている。その下には二段の基壇がある。上段が高さ28cm、奥行き24cm、下段は高さ10cm、幅36cm、奥行きは28cmを測る。前面に水受けが置



第９図　極楽寺の石造物（3）（Ｓ＝1/10）



第10図　極楽寺の石造物（4）（S＝1/10）

第11図　極楽寺の石造物（5）（S＝1/10）

かれている。総高は76cmである。

[参考文献]
島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書２―龍昌寺跡―』
島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書３―安養寺・大安寺跡・大龍寺跡・奉行代官墓所外―』
池上悟2010「温泉津地区における特徴的な墓石」『石見銀山遺跡石造物調査報告書10―金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物―』島根県教育委員会・大田市教育委員会

第６節　極楽寺墓地調査のまとめ

浄土宗極楽寺墓地の調査は77基を実測した。東側墓地では77基を含めた270基の存在を確認した。さらに、地蔵を含めた古層の石塔は北側墓地で19基、東側尾根上墓地で23基、合計312基を確認することができた。その他に近代から現代の墓標が数十存在している。

墓塔としては一石宝篋印塔８基、一石五輪塔７基、組合せ宝篋印塔31基、組合せ五輪塔５基、無縫塔27基が確認できた。地蔵は43基確認できた。

最古の紀年銘は慶長14（1609）年の一石宝篋印塔（第７図５）である。一石宝篋印塔は形態的に銀山柵内と同一の変遷をしていることが判明した。一石五輪塔や組合せ五輪塔の数は少ない。埋没している個体や墓地整理により移動された可能性もあるが、極楽寺では少数派である。他に古層の石塔と考えられるものとして舟形光背墓標がある。温泉津地区周辺の類例を参考にすると慶長から元和期の所産と推定することができ、極楽寺においては古手の石塔である。

温泉津地区を含めやはり数が多い形態は円頂方形墓標と円頂方柱墓標である。これらの造立は確認できた紀年銘から18世紀中頃以降の造立である。円頂方形墓標では1660年を除けば1751年以降、円頂方柱墓標では1764年以降となり、造立開始はほぼ同じ時期である。しかし全体の造立数を見ると円頂方形墓標がやや古い傾向が確認できる。極楽寺東側墓地で確認できた紀年銘を元に造立数を考えると1830年代の12基、1840年代９基と19世紀以降増加し、明治時代にピークを迎える。これらは西念寺墓地との傾向とも同一である。墓地や石塔の整理や人口の移動など多くの要因があると考えられる。

第７節　総　括

１．小浜地区と極楽寺

平成22（2010）年度の石造物調査グループは、大田市温泉津町小浜地区を重点的に取り上げ、当地区中墓石数において卓越する極楽寺墓地を集中的に調査した。

石見銀山の外港として重要な位置を占め、繁栄した「温泉津湊」（地域）には「波路浦」、「沖泊浦」、「温泉津浦」、「小浜浦」の諸港があり、それぞれが銀山経営と連動してその歴史的役割を果たしている。

そして、中世後半からは銀山開発に関連して人と物資の往来が盛んになり、近世には北前船等による日本海貿易の隆盛に合わせて温泉津浦が商港として繁栄し、港街が形成され、活況を呈したのであった。このことは当該地区に存在する恵珖寺墓地・西念寺墓地・金剛院墓地の悉皆的調査により考古学的にも裏付けられた。

温泉津港街に次ぐ商業的機能を有し、街区を形成したのが小浜地区である。その形勢振りを反映する有力寺社やその付属の墓地存在からも推定しうる。とりわけて、極楽寺との関連が想定される寺周辺の墓地では総数470余基の墓石が確認されており、一寺院に関わる墓石数としては最多の部類に属するといってよく、往時この寺が小浜地区の中核的な宗教施設であったことを教える。悉皆的調査の対象とした所以である。

2．墓地の現況

浄土宗極楽寺は「無量山證滇院」と称し、16世紀後葉の創建と伝えられる。温泉津浦街と小浜地区を分ける低丘陵がほぼ東西方向に走っている。その南斜面に刻まれた小谷口前方に寺宇が営まれ、背後の谷斜面と寺宇東側から丘陵尾根斜面に墓地が広がっている。

現状で墓区は三つのブロックに分けられる。寺宇東側のブロック＝東側墓地は墓石数が多く、規模としては最も大きいが、本来の位置を離れて集積された一群であり、墓石群としての一義的意義は失われている。寺宇背後の墓石群＝北側墓地もかなり整備されており、各墓石がどこまで原位置を保っているかどうか疑問がある。残りの東尾根斜面群＝東側尾根上墓地では墓標類は一定区画に収められている。墓塔類は尾根の最下段に集積されており、これも二次的変異を想定せざるをえない。

したがって、悉皆的調査は、概略的なまとまりとしての墓石ブロック枠を是認したうえで墓石の種類と基数の確認を主とし、銘文判読による造立年代確定、そこから見えてくる造墓活動の推移状況の観察を行って当初の調査目的達成を試みた処である。

3．悉皆的調査の結果

極楽寺墓地の墓石の種類と形式並びに時期的変遷はおよそ以下のようになる。ただし、北側墓地と東側尾根上墓地の墓標系墓石については調査の都合で形式の確認に止まった。

ⅰ）墓塔系墓石

北側墓地＝一石宝篋印塔１基、組合せ宝篋印塔４基、無縫塔１基、地蔵13基

東側墓地＝一石五輪塔４基、一石宝篋印塔７基、組合せ宝篋印塔17基、無縫塔23基、地蔵28基

東側尾根上墓地＝一石五輪塔３基、組合せ五輪塔５基、組合せ宝篋印塔10基、無縫塔３基、地蔵２基

ⅱ）墓標系墓石

北側墓地＝円頂方柱墓標、平頂方柱墓標多数基、突頂方柱墓標、笠付方形墓標、約100基

東側墓地＝円頂方形墓標65基、円頂方柱墓標95基、平頂方柱墓標５基（花崗岩製２基）、舟形光背墓標１基

東側東尾根上墓地＝円頂方柱墓標主体、約90基

ⅲ）墓塔系と墓標系の年代的位置について紀年銘から次のような結果が得られた。

墓塔系では、一石宝篋印塔の２例から慶長14（1609）年と万治２（1659）年の紀年銘が読み取られた。無縫塔は寛政11（1799）年、文政11（1829）年、嘉永２（1849）年、明治５（1872）年の４例がある。墓標系では、円頂方形墓標では10例で紀年銘が確認されている。代表的な例は万治３（1660）年、宝暦13（1763）年、文化３（1806）年、嘉永２（1849）年、明治12（1879）年である。円頂方柱墓標では13例の紀年銘墓石が発見された。年代の古い順からいくつか取り上げると、明和元（1764）年、文化２（1805）年、天保８（1837）年、嘉永４（1851）年、明治19（1886）年等がある。

ⅳ）墓石の類型・形式・紀年銘から墓地三ブロックの概況をまとめておこう。

北側墓地は墓塔系の割合が低い。墓標系が大勢を占めているのは造墓が長期にわたることと関連すると思われる。墓地区画が整然となされていることも直近まで整備が行われていることの証である。注意されることとして、墓標系中に笠付方形墓１基と無縫塔１基が見られることである。被葬者に寺有縁者や有力檀家層が含まれていることを予測させる。

東側墓地は寺宇に近接し、墓石数が多く、墓塔・墓標の各形式が揃って見られ、紀年銘の流れからは造墓が長期間継続していることも判明する。無縫塔の集中はこの墓地が寺との直接的関係が深いことを示しているし、舟形光背墓標や花崗岩製墓標の存在も有力檀家との繋がりを推測させる。

けだし、東側墓地が極楽寺墓地の中心的な地位を占めていたとの証左と考えることができよう。関心を惹くのは万治３（1660）年銘の円頂方形墓標の存在である。これまで初出例として銀山柵内妙正寺墓地の宝永４（1707）年銘墓が知られている。これと対比すれば本例は相当早い時期の出現となる。極楽寺墓地全体の意義付けとも関わって、今後の精査が注目される処である。

東側尾根上墓地は墓標系域と墓塔系域が区別された。これが本来の姿か否かさらなる検討を要するが、現状では墓塔系の一石宝篋印塔を除いて各形式が存在し、数量も東側墓地と比べて遜色ない。尾根斜面を利用した古相墓地の様相がうかがえる。

４．極楽寺墓地の様相とその意義

極楽寺墓地は、墓地類型的には墓標系主・墓塔系従型に含めることができる。石見銀山柵内の安養寺墓地や大森地区の西性寺墓地と同類型に属する。温泉津地区の西念寺墓地、恵珖寺墓地も墓標系主体で墓塔系の割合は低いが、墓地の構成、墓域内での墓塔・墓標の分布に地域的な特徴が見られた処である。

極楽寺墓地の場合、後世の変更があり、とくに東側墓地は二次的改変が著しいので他例墓地と単純な比較はできない。しかし、本来的な墓地形成を無視して現在の墓地が造成されたとは考え難い。このことは、現に北側墓地と東側尾根上墓地が変形しているとはいえ単位墓域として存在していることからも予測可能である。

とすれば、おそらく中世・近世の交のある時点に寺宇の東辺で造墓が開始され、近世前半期内に北側に墓域を分出させながら墓塔系墓地から墓標系墓地に移行したものと推定される。そして、紀年銘からは近世中期より近代までの長きにわたって継続的に墓地経営が行われたことが明らかになった。

さらには、「戒名」の一部に「釈」・「妙」・「誉」を付した例があり、浄土宗寺院極楽寺墓地に他宗派の埋葬者（墓所移動のケースも含めて）があったことをうかがわせている。このような例は他寺院墓地でも認められており、宗派毎の排他性が必ずしも徹底したものではないことを教えているが、本墓地の場合、狭小な浦集落内にもいくつかの宗派が併存しつつもそれらを包括しうる極楽寺の寺勢の表れとして理解しておきたい。いずれにしても、こうした墓地全体の様相からは極楽寺が銀山領域内でも優勢な寺院の一つとして存在したことを想定することができよう。

５．石造物から見た小浜地区

小浜地区には近世の有力寺院として極楽寺の他に延命院（真言宗、建久７年＝1196年創建と伝える）と安楽寺（真言宗から浄土真宗、近世初頭の開基か）が知られている。この他に小庵寺が二、三存在したようである。延命院とその墓地は海岸線近くにあり、墓地には大型宝篋印塔１基、石仏５基が残っている。明治期には信徒200人を擁したと伝えられているから、旧来のままの墓地とは考えられない。

延命院とは小川を挟んだ対岸の山裾に安楽寺がある。寺宇の北東側に墓地があり、770余基の墓石が確認されている。墓類・形式・基数では宝篋印塔７基、五輪塔６基、無縫塔１基、墓標系墓石717基、石仏36基、その他３基が判明している。墓標系墓石には18世紀後半から現代までのものが含まれる。安楽寺南南西の小谷口にも一群の石造物が存在する（第４図群番号39）。宝篋印塔、五輪塔、無縫塔等の墓塔系25基、墓標系65基がカウントされている。この群（群番号39）と尾根一つ越えた西側にも石造物群がある（第４図群番号36）。かつて延命院が所在したと伝えられる個所で、無縫塔８基の他に宝篋印塔、石仏、墓標系墓石等約60基が認められている。

これらをみると、安楽寺とその周辺には総数で900基を優に超す墓石が小谷単位で群をなして存在することが知られる。類型では墓標系墓石が圧倒

的な割合を示すが、墓塔系も一割強確認できるから墓標系主・墓塔系従型の中世末頃に始発して近世に盛行するタイプが普及していたことになる。安楽寺墓地のみをとっても墓石総数・墓塔系・墓標系の割合において極楽寺のそれと遜色ない。おそらく、温泉津湾に注ぐ小川を挟んで南北に漁業主体の集村的集落が展開し、それが近世期に銀山への物資流入に関わってそれぞれの地域性に応じて繁栄したことが想定される。

「温泉津湊」が交易港として発展する直接的な契機は毛利氏の進出にある。その際、北岸集落の一角に接岸施設を設けたことが推測される。極楽寺東に厳島神社が創建（永禄11年＝1568年）されたことや極楽寺背後の丘陵上に毛利氏の奉行所が置かれたとする論説を踏まえてのことである。また、小浜地区には二個所に番所があり、それぞれ「宮前口番所」と「堀越口番所」と称され、前者番所は厳島神社付近に設置された可能性がある。神社脇には温泉津沖泊街道に通じる道があり、番所がその出入り口を管轄した蓋然性は高い。

北岸集落が16世紀後葉から近世に交易活動に傾斜した街区化したことに対して、南岸集落は北岸集落の補完的地位を得ながら農漁村集落としての性格を保持したことが考えられる。

このように両集落が相違する歴史的推移を辿るのは地理的条件によるところが大きいともいえる。注意されるのは南北を分ける小川の存在である。この川が搬出する土砂は海岸流に影響されて河口左岸により多く堆積し、安楽寺付近には砂浜海岸が現出している。こうした遠浅海岸は小規模漁業の立地条件には好条件となっても交易物資を輸送する大・中型船の係留には不向きであることは容易に想定できる。そこから港湾としてやや恵まれた北岸集落に商街区が生まれ、砂浜海岸を控えた南岸一帯には農漁村的な伝統的産業主体の集落が展開したのではないかとの思いが巡る。さらには、そうした農漁村的な要素に商業的要素が加味されたことで、小浜地区の特性ともいうべき根強い持続的な地域力が発揮されたのではないかと推測するのである。

6．今後の課題

かなり想像を交えて石造物から小浜地区の地域性に言及してみたが、あらためて調査の成果の小さくないことを評価しつつも、なお未達成の部分が多々あることを自認する。今後は、極楽寺墓地と安楽寺墓地における未確認事項を整理し、踏査の範囲を広げていく必要があると考えられる。たとえば、極楽寺背後丘陵上については一定の調査は終えてはいるが、毛利氏奉行所の存在が説かれていることを考慮した再調査も求められるところである。あるいは、先年調査された梨ノ木坂遺跡で石畳道が発見され、往時の小浜街道の整備状況が明らかになり、銀山街道の一部として小浜街道が重視された様子をうかがうことができた。小浜地区の発展を裏付ける事実として注目されよう。これらの諸成果を受け止めたうえでいま少し小浜地区の調査密度を濃くすることが希求されるのではないかと思考する次第である。

この項の記述にあたり、調査担当者の守岡正司氏から的確な助言を多く頂戴した。また、文献史料調査担当の中木紗友美さんからも有益な史料提供を受けた。記して感謝し、負うところを明らかにしたい。

［参考文献］

温泉津町1994・95『温泉津町史』上・中巻
島根県教育委員会2010『梨ノ木坂遺跡・庵寺古墳群・庵寺遺跡Ⅱ』
本多博之2010「毛利元就の温泉津支配と輝元の継承」『日本歴史№743』日本歴史学会

第４章　温泉津沖泊道周辺の石造物

第１節　調査の概要

温泉津沖泊道周辺の石造物は街道調査の一環として平成14（2002）年６月10～14日に調査された。調査は石見銀山街道のルートの確定を目指して行われた。調査内容は調査カードの作成、実測、拓本採取、写真撮影である（島根県他2003）。資料の公開が一部であったので（宮本2004）、ここで報告する。参加者は鳥谷芳雄、宮本徳昭、湯川登、岩谷和樹である。なお、鞆ケ浦道周辺の石造物は別途報告する予定である。本文は（宮本2004）をもとに作成した。

第２節　石造物の概要

石見銀山遺跡柵内から温泉津・沖泊に向けて報告する。

（１）大谷六地蔵（「七騎地蔵」ともいう）

巌窟に石製地蔵が７体安置されている。巌窟は、入口幅2.0m、奥幅1.6m、奥行1.0～1.4m、高さ0.9mを測る。地蔵は台座と本体が別造りである。地蔵は立像で全て頭部を欠失している。像高38cm、幅16cmである。全ての背面に「大谷」と刻む。台座には施主名が刻まれ、１つには天保11（1840）年銘がある。巌窟内には一石五輪塔が１基存在する。

石製地蔵が安置されているこの巌窟の上流側にはもう１つ別の巌窟がある。入口幅1.4m、奥幅1.3m、奥行0.4m、高さ0.7m以上である。窟内には石造物はない。

（２）降路坂の題目塔（第14図２）

降路坂から西田へ下る道路の左手、川を渡った所に位置する。幅0.53m、厚さ0.25m、高さ1.28mを測り、下部は土砂に埋没している。側面は剥離している。正面に「妙法蓮華経」、左側面に「一切衆生佛果言提妙貞」、右側面に「貞享三丙寅十月日蓮乗」と刻む。貞享３（1686）年、蓮乗が延宝２（1674）年７月18日に亡くなった母妙貞のために建立したものという（秋山1978）。

（３）西田の石仏（第14図３）

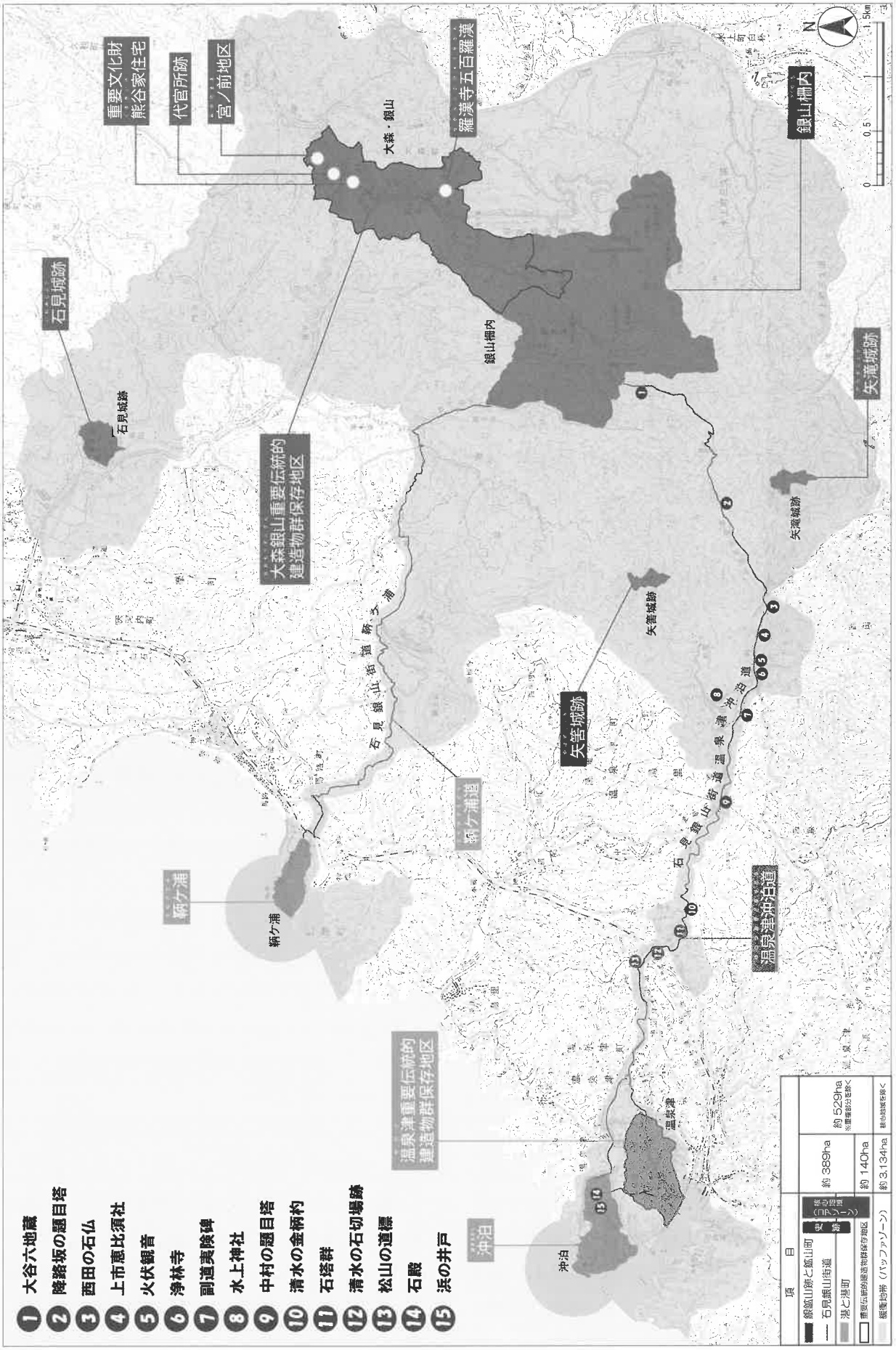
降路坂から西田の谷へ降り、谷がやや広がった川上流の崖下にある。石殿内に光背付立像があり、地蔵は台座の上に置かれる。光背左表に「明治廿七年十月再建」と刻まれる。光背の幅19.5cm、高さ34cm、像高15cmを測る。台座には蓮弁が刻まれ、幅19.5cm、高さ6.5cmを測る。前には香炉が置かれ表面に「施主岡崎トモ（左から）」と刻まれる。石殿は各壁が一枚石で造られ、屋根は妻入りに棟が表現されている。

西田の石仏から川下に下った右岸山腹に墓地がある。通称「七曲り」という地であるという（宮本2004）

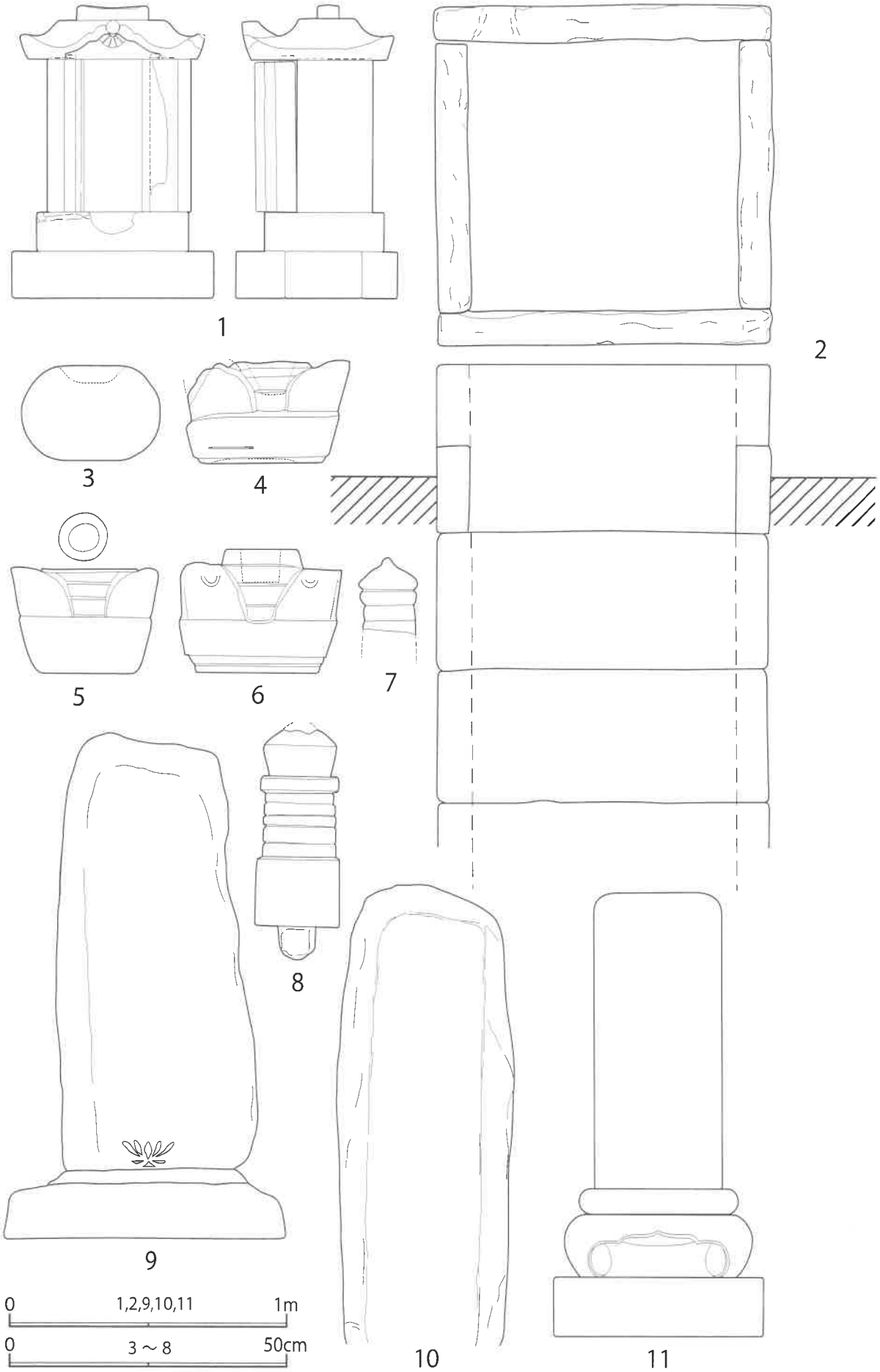
一石五輪塔２基（第16図３、４）、円頂方柱墓標（第16図６）が１基ある。一石五輪塔（３）は空風輪を欠失し、表面に梵字を刻むが風化している。基壇を含めた残存高74.5cm、含まない高さ66.3cm、地輪幅24cmである。一石五輪塔（４）は完形で、基壇を含めた総高は87.5cm、五輪塔高82cm、地輪幅21cmを測る。空風輪の側面は直線状を呈し、新相である。円頂方形墓標（６）は２段の基壇の上に本体が置かれ、最下段基壇幅39cm、中段基壇幅29cm、墓標幅18cm、墓標奥行き15cmを測る。正面には枠囲いがある。

（４）火伏観音（第15図）

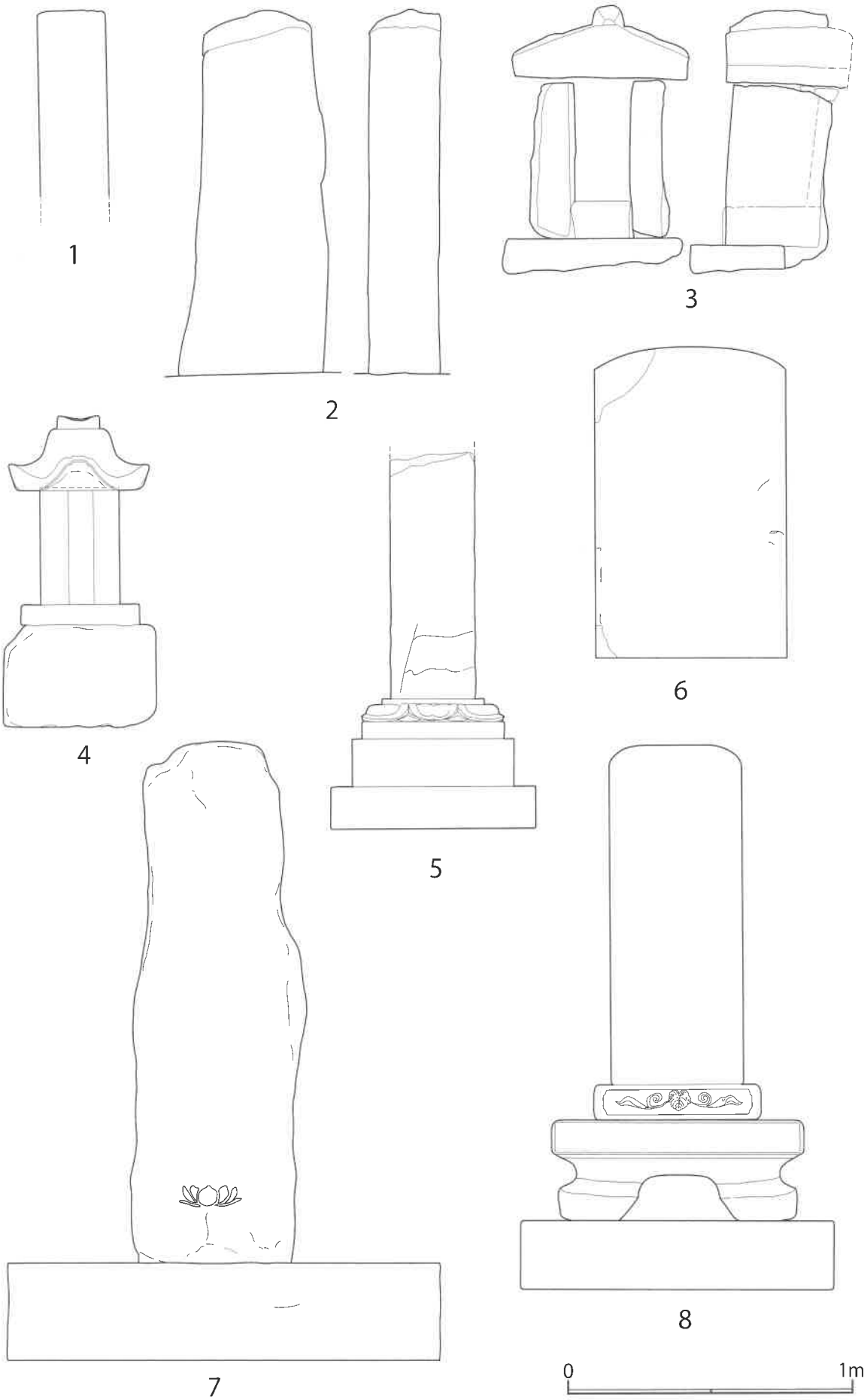
火伏観音は西田の集落中央の南側斜面に位置する。前幅3.0m、奥幅3.4m、奥行3.25m、高さ中央で2.1m、その他で1.55mを測る巌窟内の奥壁中央を0.7mほど一段掘り窪め、火伏観音が納めている。奥側は13cmほど床面が高く削り出されている。観



第12図　温泉津沖泊道周辺の石造物位置図



第13図　温泉津沖泊道周辺の石造物（S＝1/10・S＝1/20）



第14図　温泉津沖泊道周辺の石造物（S＝1/20）

音は像高51cmで、光背と蓮華座を含めた高さは74cmである。台座の上に五輪塔水輪が置かれ、その上に安置されている。

観音像以外に窟内には、組合せ宝篋印塔（相輪２、九輪１、笠３、塔身２、基礎６）、組合せ五輪塔（空風輪７、火輪１、水輪２）、無縫塔（塔身２、基礎１）、一石五輪塔２基、舟形光背墓標１基、地蔵８基、蓮弁を持つ台座１基がある。実測は全て行っていない。

組合せ五輪塔の空風輪（第15図１～４、21～23）は７基確認でき、欠損しているものが多い。（４）は下部が幅広で宝篋印塔相輪の可能性もある。（１、２、21）の空輪の中央には稜線が明瞭である。(22)は丸みを持つ。火輪（24）は幅23cmと小型で、頂部には円形のほぞ穴がある。水輪（25、26）は(25)が凝灰岩、(26)は福光石である。(25)は奥に安置されている観音像の台座として使用されている。

組合せ宝篋印塔の基礎（第15図５～７、11、12）は一部組合せ五輪塔の地輪の可能性がある。（５、11、12）は側面が上方に向け狭くなり、頂部は凸状に加工されている。笠（13～15）は各個体で表現が異なる。(13)は下位の段級は一段で、やや幅広である。隅飾りは外側に広がり、輪郭線が描かれる。上部には円形のほぞがあく。(14)は隅飾りが垂直に立ち上がり隅飾りの輪郭線はない。(15)は下位の段級が三段である。隅飾りは小さく段級の上にあり、垂直に立ち上がる。下部に一辺14cmの方形の窪みを施す。塔身（16、17）は方形を呈し、下部はわずかに彫り窪められている。相輪(18、19)は請花と突帯を持つ。突帯は（18）では丸みを帯び、(19)は太く、稜線をもちしっかりと表現される。相輪（20）は九輪部で、幅はやや広いが不統一である。

無縫塔（第15図８）は基礎を伴う。基礎は内部が大きく削られ軽量化が図られている。表面には梵字が彫られる。塔身は高さ72.5cm、幅30cmを測り、ほぞは断面円形である。

台座（９）は二枚組で、幅46cm、高さ10cmを測り、両側に蓮弁と間弁を持つ。ほぞ穴は幅16cm、長さ10cmである。観音像の台座と窟内左側に存在する台座が接合する。舟形光背墓標の台座の可能性が高い。

舟形光背墓標（10）は、温泉津地区で特徴的な墓標の一つである（池上2010）。高さ139.5cm、最大幅47.5cmを測る。下部には間弁を伴う蓮弁が彫られている。厚さは上部で5.5cm、蓮弁文付近で10cmを測る。正面には「南無阿弥陀佛」としっかりと彫り込まれる。下半にはやや小さく戒名を表している。表面には工具痕が明瞭に残る。石材は白色のきめ細かい福光石である。舟形光背墓標は温泉津地区で４例確認されており、大きく２類に分類されている（池上2010）。一方は丸みを有する頂部の突出、本体正面の輪郭、下端部の間弁を伴う蓮弁表現、薄い台石を伴うことを基本とし、慶長年間の造立と想定されている。もう一方は頂部の顕著な突出、正面周囲輪郭の消失、間弁を伴わない蓮弁表現、高い台石を伴うことを特徴とし、元和年間造立の可能性を指摘する。火伏観音例は正面輪郭の消失、間弁を伴う蓮弁表現、薄い台石を伴うことから両者の過渡的な特徴を有している。造立は紀年銘がないが、慶長年間をそう離れない時期と推定される。

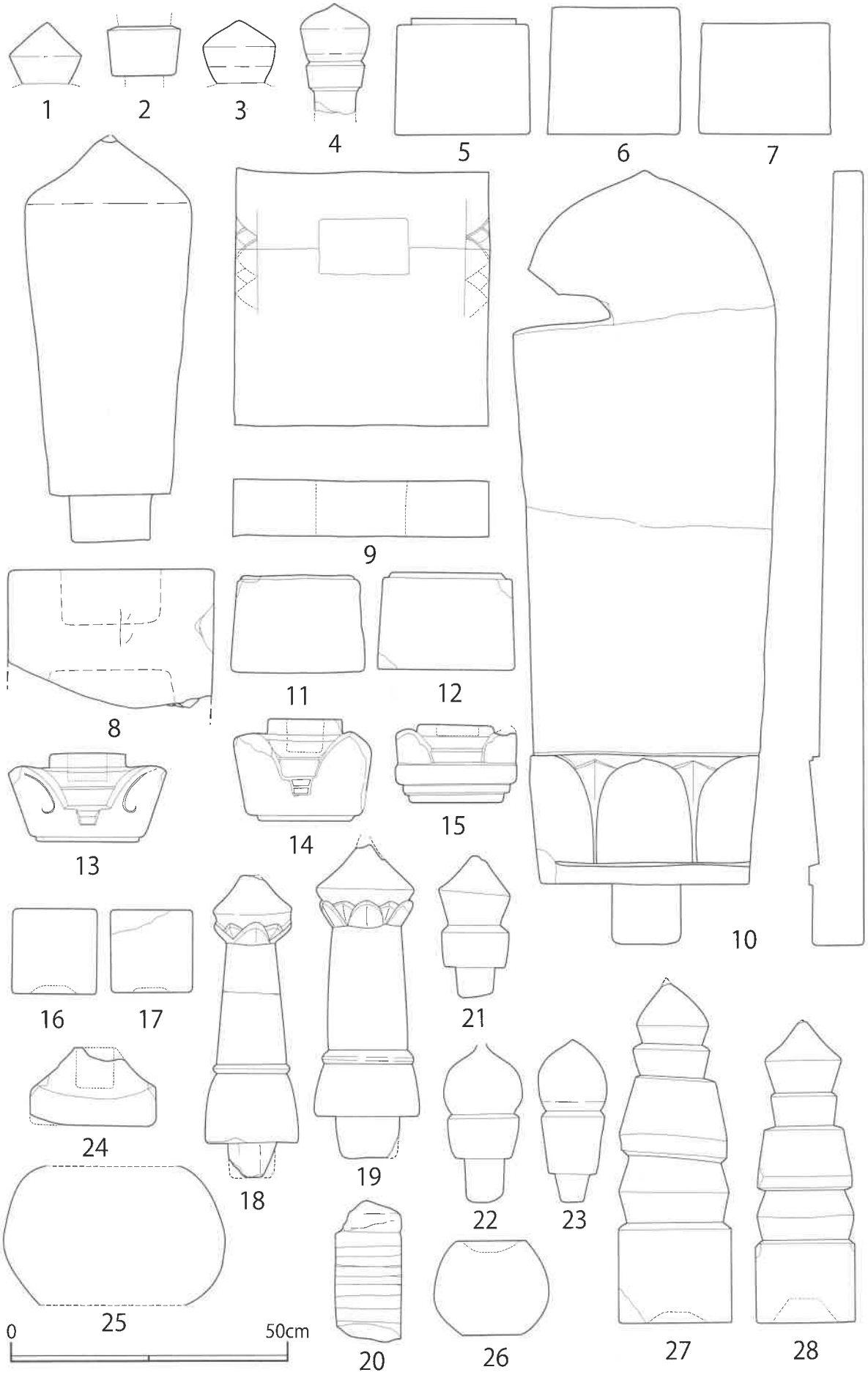
一石五輪塔（27、28）のうち、(28)の地輪には天正六（1578）年四月廿九日と刻まれる。２基とも形態は類似し、火輪は台形で、水輪は中央に稜を持つ。

（５）浄林寺墓地内石造物群（第16図５）

宝篋印塔の笠部で、隅飾りは開いている。下部の段級は三段、上部の段級は四段である。周囲には風化した五輪塔空風輪が存在する。

（６）水上神社（第16図１、２）

（１）は花崗岩製の鳥居である。享保９（1724）年、尾道町大工山根茂三郎銘がある。高さ3.5m、



第15図　火伏観音の石造物（S＝1/10）

最大幅４ｍを測る。尾道大工が製作した花崗岩製鳥居は大田市温泉津町龍御前神社の享保16（1731）年銘（清四郎）、大田市富山町王寺神社の寛永元（1748）年銘（清三郎）が知られ、18世紀前半に集中していることが分かる。（２）は水上神社境内にある井戸代官碑である。安政２（1855）年銘である。最下段の基壇幅1.5m、総高2.1m、本体高1.21m、幅0.47mを測る。

（７）副道夷険碑付近（第14図６～８）

（６）～（８）は（６）の副道夷険碑を向かって右側に置いて三基が並んでいる。（６）は副道夷険碑で、元は上の道の脇にあったという（宮本2004）。円頂方形型で、幅62cm、高さ109cm、厚さ24cmを測る。表面は丁寧に加工され、銘文が刻まれている。西田付近の悪路を堀藤十郎伴徳と藤井与兵衛義孝が私費で改修したことに対する感謝を表したものである。文化８（1811）年12月、佐和華谷撰、庄屋熊谷市郎兵衛直清・頭百姓渡利覚五郎定恒・百姓代笠井茂左衛門恒忠が、石工福光住坪内伊平太只氏に作らせたものである（和田2000）。側面の一部がコンクリートで補強されている。（７）は向かって一番左側にある。コンクリートの台座に本体がのる。本体は高さ185cm、幅55～65cm、厚さ40cmを測る。正面に「南無阿弥陀佛」、延享五（1748）年、キリークと蓮華が刻まれている。（８）の「荒瀧麟児之碑」は副道夷険碑の横、３基の中央にある。基礎の上に四足付基壇があり、更に低い台石の上に本体がのる。本体は高さ119cm、幅46.5cm、厚さ28cmを測る。低い台石は、唐草文を陽刻する。

（８）中村の題目塔（第14図５）

本体は上部が欠損し、三段の基壇、蓮弁が刻まれた台座がある。本体は残存高154cm、幅30cmを測る。蓮弁は立体的に表現されている。正面に「南無妙法蓮華経」、右側に「右ハゆさとみち左ハゆ能つみち」と刻む。享保□年、臼井儀右衛門により再建されたものである。原位置ではない可能性がある。

下流部「郷地区」に石塔群がある（第13図５～11）。組合せ宝篋印塔（５～８）、石碑（９～11）がある。（５）と（６）は笠部、（７）と（８）は相輪部である。（５）の隅飾りは開き、上面には円形のほぞ穴がある。（６）は下方に段級をもつ。（７）は宝珠の中央に溝がある。（８）は宝珠の下に突帯がある。（９）は文化11（1814）年建立の井戸代官顕彰碑である。正面下部には蓮華文が施される。（10）は日露戦争による戦死者の供養塔である。（11）は大正９（1916）年建立の個人顕彰碑である。

（９）清水の金柄杓（第14図４）

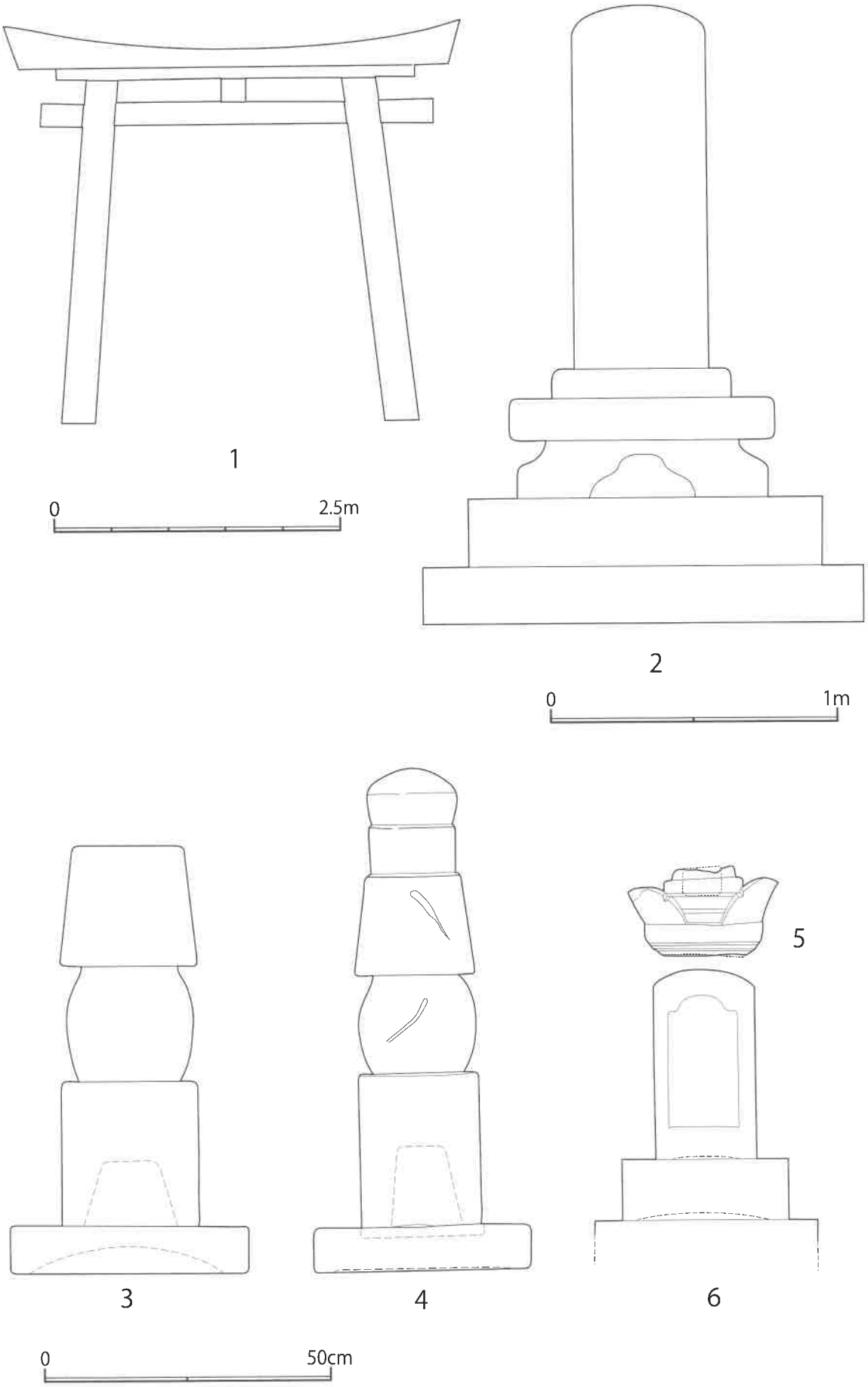
水溜の上に台石があり、上部には石製祠床石がのる。台石の裏には別の石祠片があり、現在のものは再建である。壁は一石造り、破風付屋根がのる。外法で本体は幅28cm、高さ41cm、奥行24cmを測る。屋根は最大幅50cm、高さ41cm、最大奥行41cmを測る。床石は、一辺43cm、厚さ７cmの板石である。台石は幅54cm、奥行き50cm、高さ36cmを測る。

（10）石造物群（第13図３、４）

清水の金柄杓から大田市役所温泉津支所へ向かう市道から温泉津沖泊道が分かれる「清水の分かれ」に所存する。組合せ五輪塔水輪（３）は、横長を呈する。組合せ宝篋印塔の笠部（４）は、隅飾りがやや開き、上の段級は四段である。

（11）松山の道標（第14図１）

保存のためコンクリート製の祠に納められ、四面に銘が刻まれる。上面は平坦で、幅23～24cmの方柱である。高さは現状で65cmを測る。現在の正面には、「右　銀山大森五［　　］／いつも大や$\boxed{し}$ $\boxed{ろ}$［　　］と刻む。他の面は判読できない。



第16図　温泉津沖泊道周辺の石造物（S＝1/10他）

(12) 石殿（第13図１）

沖泊の恵比須神社下、「浜の井戸」脇にあり、内部に千手観音立像を安置する。舟形の光背を持ち、彩色される。像高23cm、総高44cmを測る。石殿は各壁一枚石で、正面には袖石と石扉がある。左側に「施主沖泊中」と刻まれる。石殿の形態や安置されている像から西念寺や金剛院に存在する西国観音札所の移し霊場との関係が指摘できる。

(13) 浜の井戸（第13図２）

一辺1.2mを測る方形の井戸で、板石で四方を囲む。４段以上積んであることが確認でき、最上段は凸状の石材を組み合わせている。地上部の高さは0.4mで、地下は1.6m以上である。

[参考文献]

秋山達郎1978「ごうろ坂あれこれ」『郷土石見６』
和田孝2000「堀伴徳・藤井義隆の謝恩碑について」『郷土石見54』
島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会2003「街道調査の概要」『石見銀山遺跡調査ノート』
宮本徳昭2004「沿線と周辺の石造物」『石見銀山街道鞆ケ浦道・温泉津沖泊道調査報告書』
池上悟2010「温泉津地区における特徴的な墓石」『石見銀山遺跡石造物調査報告書10』

第５章　大田市大森町石銀地区周辺の石造物

第１節　はじめに

本谷地区、於紅ヶ谷、竹田地区では、平成11・14年度に石造物調査が実施された。

石銀藤田地区は、仙ノ山山頂近く、標高約400m付近にある広大な平坦面である。石銀地区では、平成８～10年度に発掘調査が行われ、銀精錬を行った可能性のある建物跡を含む建物跡、道路遺構などが調査された。その場所を取り囲むようにいくつかの小高い丘陵が見られるが、これらの尾根や斜面が墓地となっている。今回の調査は、この内の墓Ⅱ・Ⅳと呼んでいる場所について調査を行った。

第２節　石銀地区墓Ⅱの石造物

石銀千畳敷調査地475m付近。

石銀千畳敷地区は平成５年度の林道建設に伴う試掘調査を経て、平成６～７年度に発掘調査がされている。墓Ⅱはその北側に南北に伸びる尾根筋の北端部、標高486m付近に位置する。この場所は樹間から大森集落を望むことが可能で、代官所や城上神社から観世音寺付近を見ることができる。

３基のマウンド状の高まりが並んで見られる。この内最北端の１基は自然地形の可能性が高いが、２・３基目は基部に石列を備えた方形基壇である。基壇は一辺２mの方形で、北側には人頭大の石を並べた石列が見られる。石塔石材は、その周囲に散乱しており、宝篋印塔の部材10基、一石宝篋印塔１基、一石五輪塔１基がある。組合せ宝篋印塔の内、石材を判断できるものはいずれも福光石である。

組合せ宝篋印塔は大型品の二個体と考えられ、いずれも基礎正面に「元和」と読める年号を記す。第18図４は元和の後に戌正月、(10) は酉二月とあることからそれぞれ1618年、1621年と考えられる。

この２基を組み直すと総高は約180～190cmになると思われ、龍昌寺跡の元和３年銘組合せ宝篋印塔の159.5cmを大きく上回る（第20図４、５）。大安寺跡には当初に造立された大久保長安の墓塔と推定される組合せ宝篋印塔の復元総高が206cmと推定されているが、それに次ぐ規模の宝篋印塔となる（第20図１）。

(11) は一石宝篋印塔である。全高62cm、最大幅24.5cmの大型品だが、相輪を欠く。正面に銘があるが、年号部分が摩耗して読めない。

(12) は一石五輪塔である全高35cm、最大幅14.5cmの小型品で、空風輪を欠く。地輪正面に銘があり、正徳４年（1714）と読める。

第３節　石銀地区墓Ⅳの石造物

石銀地区墓Ⅳは、石銀藤田地区と石銀千畳敷地区が接する場所を真南に見下ろす、標高475mから480mにある２段の平坦面である。調査は２段の平坦面のうち、下方側の石造物について調査を行った。福光石製の基礎６基、円頂六角柱墓標１基、一石五輪塔１基がある。

これらのうち、最も古いものは慶長８年（1603）銘の福光石製一石五輪塔（第21図１）で全高77cm最大幅20.5cmを測る。

円頂六角柱墓標（第21図２）は、全高64cm、最大幅34cmで右面に宝暦12（1762）年の銘が見られる。

基礎は安永５（1776）年から天明元（1781）年までの限られた時期に造られたものでいずれも子供の墓である。第21図２に近い時期に造られている。

以上のように墓Ⅳ下段の墓石の多くは一時期に造られた子供の墓であった。墓Ⅳの上段側には石仏が複数見られ、これらがこの基礎に乗っていた可能性も考えられる。

第21図８は、石銀藤田地区に単独で置かれてい

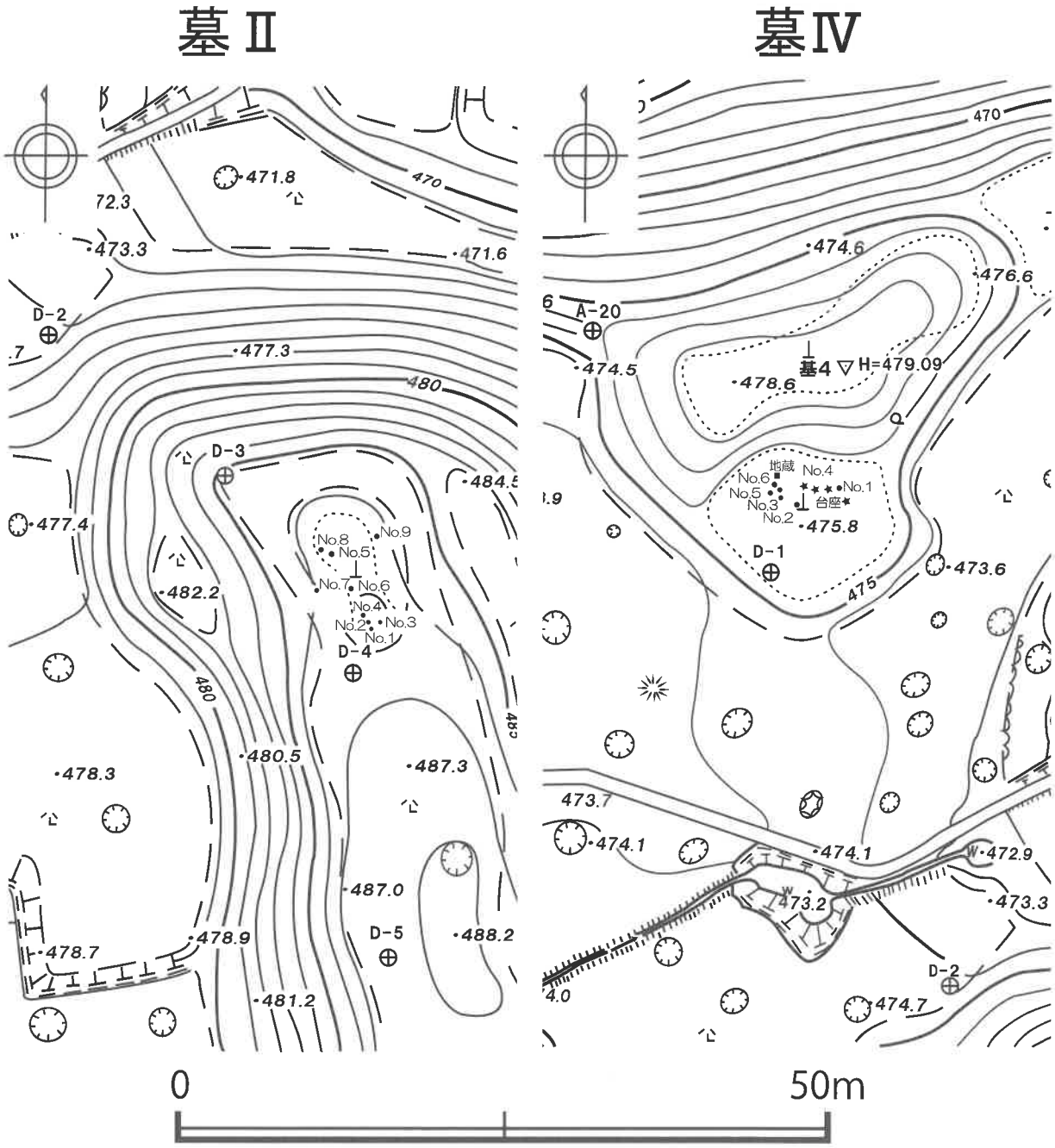
た一石五輪塔である。全高53.5cm、最大幅14cmと比較的小型で、地輪正面に承応3（1654）年が読める。

［参考文献］

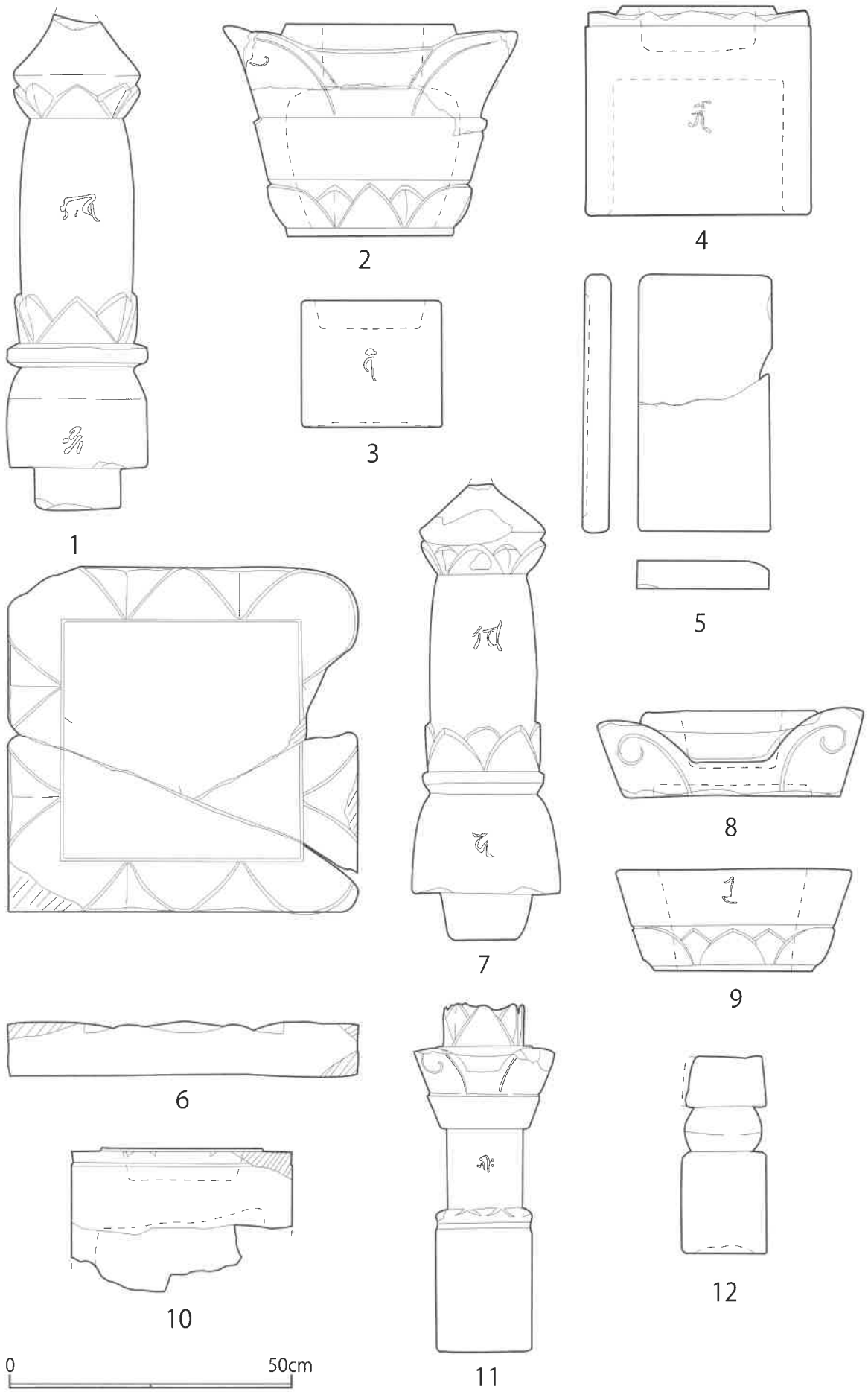
島根県教育委員会他1999「城跡調査・石造物調査・間歩調査編」『石見銀山　第３分冊』

島根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書９―西念寺墓地（３）・安原備中墓・大光寺墓地―』

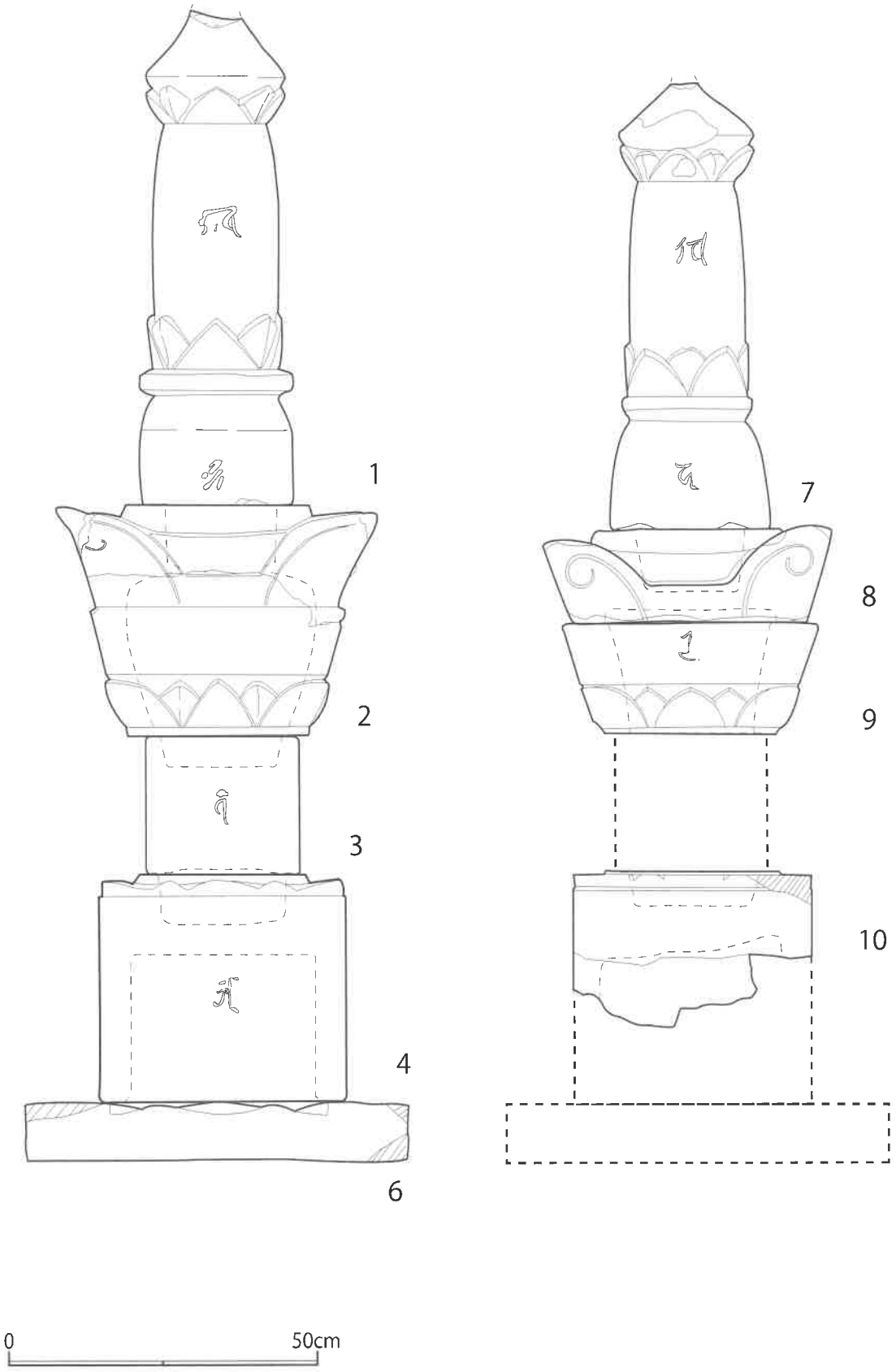
島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10―金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物―』



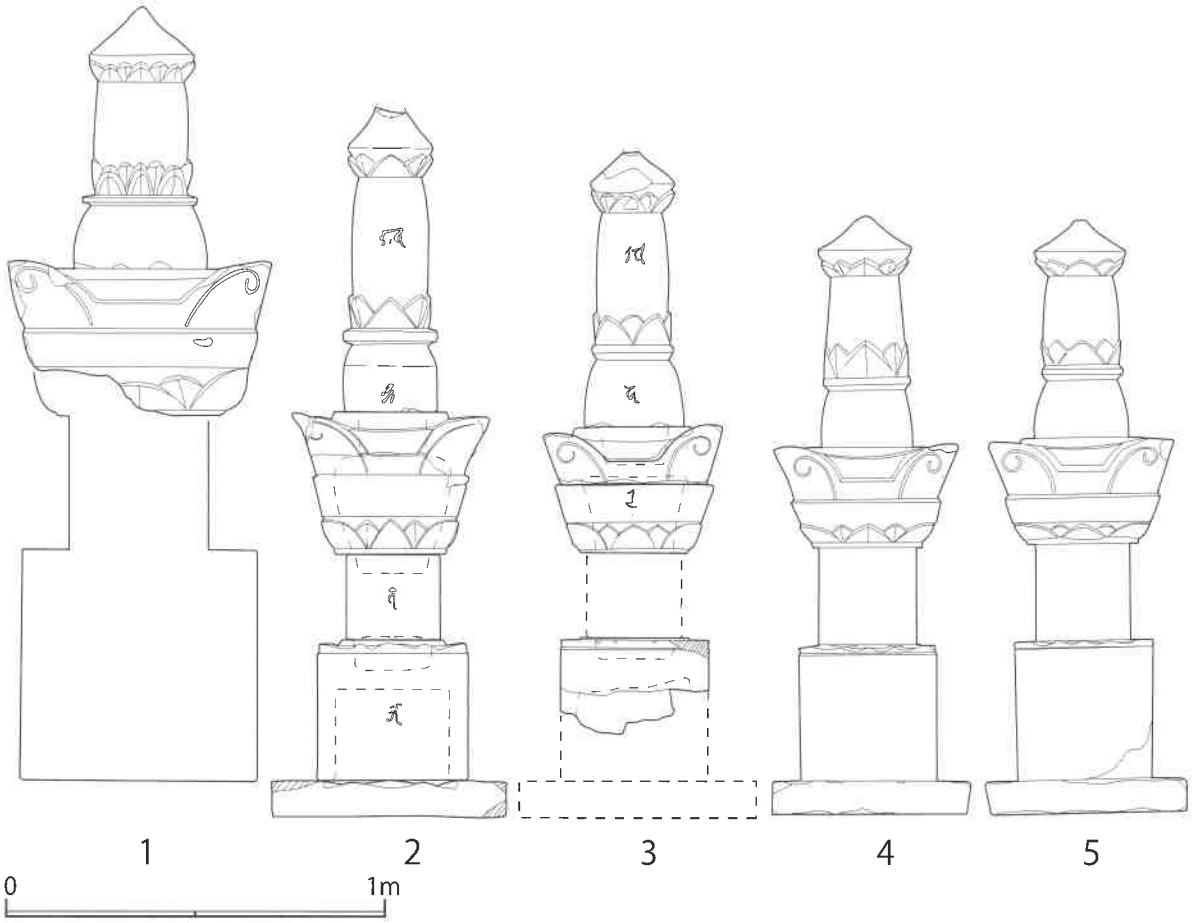
第17図　石銀地区の石造物位置図（Ｓ＝1/500）



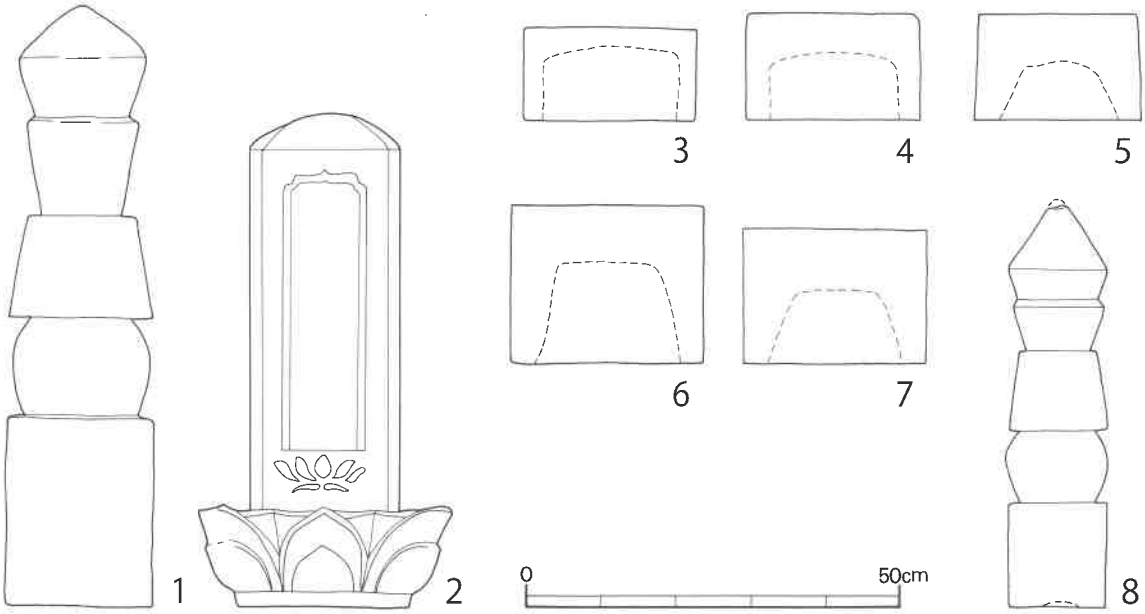
第18図　石銀地区墓Ⅱの石造物（S＝1/10）



第19図　石銀地区墓Ⅱの石造物復元図（S＝1/10）



第20図　石見銀山遺跡大型組合せ宝篋印塔（S＝1/20）
（1：大安寺跡、2・3：石銀地区墓Ⅱ、3・4：龍昌寺跡）



第21図　石銀地区墓Ⅳの石造物（S＝1/10）

第６章　石見銀山遺跡の陶製墓標・燈籠

第１節　調査の概要

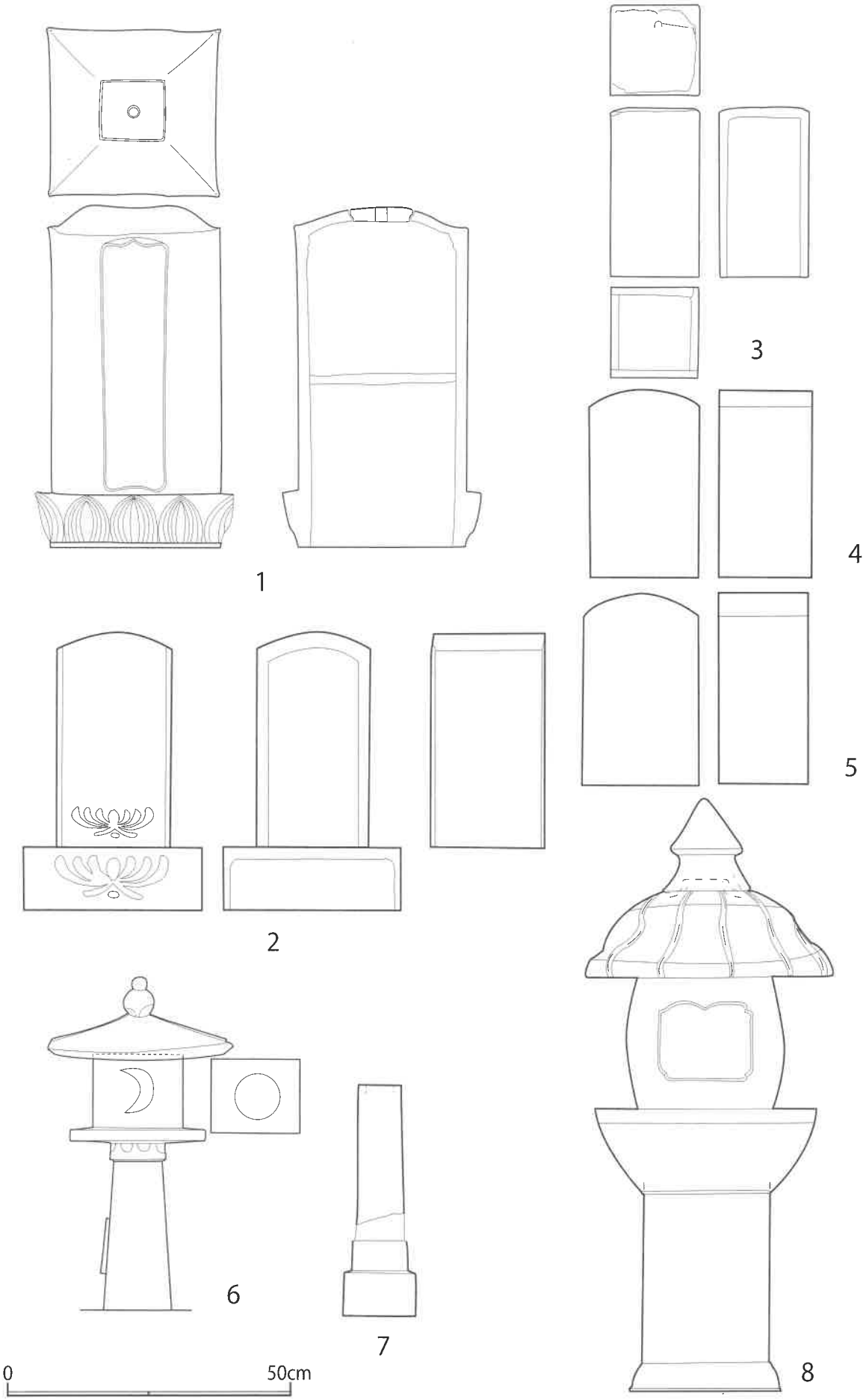
石見銀山遺跡が所在する島根県西部、石見地方は窯業が盛んな地域である。温泉津地区にも窯跡などが多数存在し、現在も操業を続けている窯元もある。主に施釉瓦（赤瓦）や鉢や甕などの丸物が生産されている。

温泉津地区の石造物調査を実施していると墓標や燈籠、花立てなどに焼物が使用されていることに出くわすことがある。陶製墓標は温泉津地区の墓地を特徴付けており、その様相を確認することは温泉津地区の墓地を考える上で不可欠と考えられる。前述した理由により、石造物調査ではあるが陶製墓標の調査を行った。現在まで調査報告したものも再掲し（島根県2008）、ここに報告する。

陶製墓標は温泉津地区を中心に大森地区からも確認され、現在11基が知られている。温泉津地区西念寺（温泉津群番号３）１基、延命院上（温泉津群番号10）１基、海蔵寺跡（温泉津群番号27）１基、旧延命院（温泉津群番号36）２基、羅漢寺（大森群番号12）３基、西性寺（大森群番号５）２基、大田市保管１基である。また、墓石に付属する陶製燈籠や花立て、蝋燭立てなどはさらに例が多い。

第２節　陶製墓標・燈籠等の概要（第22図）

（１）は西念寺にある墓標である。基壇と本体が一体造りで、総高60cm、本体高50cm、同幅・奥行き30cm、基壇幅35cmを測り、中空である。基壇には蓮弁を表現する。頂部はやや窪み、一辺11cmの方形の蓋が付く。蓋の中央は円形の穴が開く。表面は施釉され、淡黄褐色を呈する。墓標正面は枠囲いされ、文字が浮き彫りで表現され、文字上に茶褐色釉が施される。明治32（1899）年銘である。（２）は延命院上にある基壇を伴う墓標である。本体は高さ28cm、幅19.5cm、奥行き20.4cmを測り、中空である。外側は全面施釉され、厚さは約2cmを測る。明治２（1869）年銘である。基壇は高さ9.5cm、幅26.4cm、奥行き26.8cmを測り、中空である。上部の墓標を置く場所は施釉されず、他は墓標と同じく施釉され淡黄褐色を呈する。内面は一部施釉されない。墓標と基壇の正面には蓮弁状にわずかに掘り窪め、その場所に茶褐色釉で描かれる。（３）は大田市保管分の墓標である。高さ30cm、幅、奥行きとも16cmの方形である。頂部はほぼ平坦で、亀裂が入る。内は中空で、各側面は下から見ると粘土板を接合して製作されている。亀裂などから頂部も板状の粘土板を接合していると考えられる。厚みは約1.6cmを測る。焼成は良好で、表面は施釉され暗黄褐色を呈する。銘文は平滑な表面に、茶褐色釉で書かれる。明治21（1888）年銘である。（４）と（５）は旧延命院にあり、円頂形の墓標である。外面は淡黄褐色釉で施釉され、文字は表面に茶褐色釉で描かれる。（４）は高さ33cm、幅19.2cm、奥行き16.4cm、（５）は高さ34cm、幅20cm、奥行き16cmを測り、ほぼ同型である。下部は少し埋没している。正面下方には蓮弁が描かれるが、にじんでいる。銘文もにじんでいる文字があり判読できない。（５）は明治39（1906）年銘である。（６）は西念寺にある燈籠である。一体造りであるが、セメントにより一部補強される。高さ60cm、最大幅33cmを測る。表面は施釉され茶褐色を呈する。表面には（７）と同様に屋号が彫り窪められる。（７）は西念寺にある花立てである。中央はセメントで補強されている。高さ40.8cm、最大幅12.8cmを測り、頂部には5cm四方の方形の穴がある。表面は施釉され茶褐色を呈する。（８）は恵珖寺にある燈籠である。宝珠、笠、袋部、受け部、竿部の５つが別造りである。高さ105cm、最大幅44cmを測る。宝珠の表面は刺突により装飾が施される。笠には溝状の区画が存



第22図　陶製墓標・関連品実測図（S＝1/10）

在する。各部は中空で、焼成は良好である。表面は施釉され、茶褐色を呈する。底部は施釉されていない。

第3節　まとめ

今回は大森地区の墓標を実見することはできなかった。羅漢寺にある墓標には文久2（1862）年、明治3（1870）年、明治7（1874）年があるという（宮本2005）。温泉津地区の調査結果も併せてみると陶製墓標は江戸時代末から明治時代に製作されている。しかし、銘文をみると（1）では天保14年、（2）では安政3年に亡くなった人物の墓標を明治期に造立していることがわかる。これらのことから何らかの理由で明治期に陶製墓標が製作されたと推測できる。

分布範囲に関しても温泉津地区だけでなく、大森地区にも存在しており、石見銀山遺跡周辺の広域に存在している可能性もある。ただ、寺院墓地に関しても少数派で、1つの墓地に多くて2～3基が存在する程度で、陶製墓標が存在しない墓地もある。また、ある家族墓でも石製と陶製の両方が存在していることもあり、陶製墓標の造立の契機は不明である。陶製墓標の存在は、石見銀山地区に限定されるものではない。近畿圏においても存在が知られるところであり、今後、類例を待ち検討する必要があろう。

［参考文献］

宮本徳昭2005「大森地区の石造物（2）」『石見銀山遺跡石造物調査報告書5』
島根県教育委員会・大田市教育委員会2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書8』

21図8	21図1	21図5	21図3	21図7	21図6	21図2	21図4	18図12	18図11
12	7	6	5	4	3	2	1	159	158
一石五輪塔	一石五輪塔	基壇	基壇	基壇	基壇	円頂六角柱墓標	基壇	一石五輪塔	一石宝篋印塔
53.5	77	14	17.3	18	21	64	14.9	35	62
14	20.5	21	23	24.5	25.5	34	23.3	14.5	24.5
(正面)承応三年 ○○□ □九月	(正面)慶長八年 □□信士六位 三月三日	(正面)安永五丙 ○○ 童 子 申 十二月一日	(正面)安永四未 釈○○ 童 女 九月十四日 (左面)○○氏 □ヲカ 亥	(正面)天明元丑 ○○童子 九月廿四日	(右面)天明元辛丑 九月三十日 (正面)○○童子 (左面)○○源蔵 虎十郎　子 亥	(右面)宝暦十二壬午 (正面)○○一 (左面)俗名 五月廿二日 ○忠四郎	(正面)安永五申 童 ○○ 子 六月廿四日	(正面)正徳四午年 □○○□信女 八月卅四日	(正面)[　]元年 □□　□□信士 八月十七日
	福光石	基礎 福光石					福光石	空風輪欠 損	相輪欠損
1654		1776	1775	1781	1781	1762	1776	1714	
石銀	石銀墓Ⅳ	石銀墓Ⅳ	石銀墓Ⅳ	石銀墓Ⅳ	石銀墓Ⅳ	石銀墓Ⅳ	石銀墓Ⅳ	石銀墓Ⅱ	石銀墓Ⅱ

凡　例

・極楽寺、石銀地区、温泉津沖泊道周辺に存在する石造物及び石見銀山遺跡の関連品を掲載した。

・各石造物の規模は基本的に全高及び最大幅、墓標の幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している規模を残存高または各部材毎の高さで掲載した。

・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は［　］で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は　］（上欠）、［　（下欠）と示した。また推定できる文字は□内に入れて表示した。

・戒名及び名字は○○○とした。

・石造物についても実測台帳は保管し、今後の研究の資料とした。

・写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

22図2	22図1	16図6	16図4	16図3	16図5		16図2	16図1		15図28	15図27
	15図16	00-7	00-6	00-5	00-4	00-3	00-2	00-1	8-24	8-23	8-22
陶製墓標	陶製墓標	円頂方形墓標	一石五輪塔	一石五輪塔	組合せ宝篋印塔	組合せ五輪塔	石碑	鳥居	石窟	一石五輪塔	一石五輪塔
47.5	60	47	87.5	74.5	16		216	350	210	54.5	61.5
26.4	35	39	38	41.75	26.5		153	400	330	18	20.5
19.5		18					47				
(右面) 安政三年正月五日 行年三十九才 ○○シュン刀 ○○レン母 (正面) ○○○○○○ (裏面) 明治二年十一月 行年五十九才 ○○傳士刀 ○○トシ父	(右面) 明治卅二年八月吉日 三代目 ○○善吉立之 (正面) ○○○○○○ (裏面) 天保十四年字十月七日 初代文八事 浅七父	(正面) 元文四未天 [ ] 彊田 十二月廿九日				石工市右ヱ門 坪内末乃 之建	(正面) 井明府之碑 (左面) 安政二年龍舎 乙卯七月建之	(右側柱) 正一位水上神社 施主 宮能阿波守明□ (左側柱) 享保九甲辰年八月吉日 勝谷甚右衛門 惣氏子中 右大工尾道町山根茂三郎		(正面) 法恕童子 南無妙法蓮華経 天正六年四月廿九 日	(正面) 南無阿弥陀佛
				空風輪 欠損	笠		福光石	花崗岩		福光石	福光石
1856・1869	1899・1843	1739				1850	1855	1724		1578	
群10	西念寺	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道

18図9	18図8	18図7	18図10	18図4	18図1	18図5	18図6	18図3	18図2	22図8	22図7	22図6	22図5	22図4	22図3
9	8	7	6	5	4	3	2	1-②	1-①						
組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	宝篋印塔	宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	陶製燈籠	陶製花立て	陶製燈籠	陶製墓標	陶製墓標	陶製墓標
18.5	15.5	81	25	37	88.5	9.5	10	22.5	37.5	105	40.8	59	34	33	30
41.5	47.5	26	39	40	25	62	91	25	48.5	44	12.8	34	20	19.2	16
			(正面) 元和 [ ] □□ 戊正月 (正面) 元和 [ ] 蓮誉妙 酉二月								(正面) 神戸屋	(正面) 神戸屋	(右面) 明治三拾九年九月三日 (正面) ○○孩子 (裏面) ○○○義[illegible]刀 行年三才	(右面) 明治廿一年 一月八日 (正面) ○○孩子 (右面) [ ] (正面) [ ] (左面) ○○○キク刀 行年三十四才	(正面) ○○孩子
笠 福光石	笠	相輪	基礎 福光石	基礎	相輪	基礎 福光石	基礎台座 福光石	塔身	笠						
			1621	1618									1906		1878
石銀墓Ⅱ	石銀墓Ⅱ	石銀墓Ⅱ	石銀墓Ⅱ	石銀墓Ⅱ	石銀墓Ⅱ	石銀墓Ⅱ	石銀墓Ⅱ	石銀墓Ⅱ	石銀墓Ⅱ	恵珊寺	西念寺	西念寺	群36	群36	事務所

15図12	15図11	15図10	15図9	15図8	15図7	15図6	15図5	15図4	15図3	15図2	15図1	14図8		14図7
8-7	8-6	8-5	8-4	8-3	8-2-3	8-2-2	8-2-1	8-1-4	8-1-3	8-1-2	8-1-1	7-4	7-3	7-2
組合せ宝篋印塔？	組合せ宝篋印塔	舟形光背墓標	台座	無縫塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ五輪塔	組合せ五輪塔	組合せ五輪塔	組合せ五輪塔	台座	石碑	自然石碑
17.5	17.75	139.5	10	89	58							59.25	131.5	109
25	24.5	47.5	46	37.5	28							110	59	75.5
		47.5		30									46.5	29
		（正面）南無阿弥陀佛　為教誉浄		（正面）南無阿弥陀佛									（正面）荒瀧麟児之碑	（正面）延享五辰天　南無阿弥陀佛　二月十五日　龍玄代
基礎	基礎	福光石		福光石	基礎	基礎	基礎	空風輪	空風輪	空風輪	空風輪			
														1748
沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道

15図25	15図24	15図26	15図23	15図22	15図21	15図20	15図19	15図18	15図17	15図16	15図15	15図14	15図13
8-21	8-20	8-19	8-18	8-17	8-16	8-15	8-14	8-13	8-12	8-11	8-10	8-9	8-8
組合せ五輪塔	組合せ五輪塔	組合せ五輪塔	組合せ五輪塔	組合せ五輪塔	組合せ五輪塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔
25	14	17	29.25	29	25.5	25.5	56.75	55	15	15.5	14.25	18.5	16
40	23	21	12.5	14.25	13.5	12	19	17	15	15.5	22.5	25	29
疑灰岩水輪	火輪	疑灰岩水輪	空風輪	空風輪	空風輪	相輪	福光石相輪	福光石相輪	塔身	塔身	疑灰岩笠	疑灰岩笠	笠
沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道

13図1	13図2	13図2	13図2	13図2	14図1	13図2	13図3	13図4			14図4	13図5	13図6	13図7	13図8
0-1	0-2	0-3	0-4	0-5	1-1	2-1	2-2	4-1	4-2		4	5-1	5-2	5-3	5-4
石造龕入千手観音	石殿	井戸枠	井戸枠	石造地蔵菩薩立像	道標	組合せ五輪塔	組合せ宝篋印塔	石組御堂	題目塔		金柄杓の石殿	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔
107.5		184		133	65	17	18.5	109	352		109	19	22.25	14	41.5
73		121		34	24	25	29.75	54	242		50	27	29.25	10.5	15.25
									72						
（右側柱）［ （左側柱）施主　沖泊中				（正面）奉造立石地蔵尊 為諸願成就也 石州温泉津沖泊圃 施主地下中男女 享保八年卯八月日	（右面）銀山大森五［ いつも大や［乃				（裏面）昭和七年十二月吉日　七代 新治セイ建之 新治先祖代々納						
				福光石 花崗岩		水輪	笠					笠	笠	相輪	相輪
				1663			江戸時代？						江戸時代？		
沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道

13図10	13図9	13図11	13図11	14図5	14図6
5-5	5-6	5-7	5-8	6-1	7-1
自然石碑	自然石碑	台座	石碑	道標	石碑（記念碑）
165	180	44	115.75	215	109.25
67	102	76	57.5	72	67.25
	75		46	30	
（右面）明治三十九年三月建碑主中村 （正面）故陸軍歩兵曹長　○○周二郎之碑 勲七等功七級　大社教管長千家尊愛書　□□ （左面）日露戦役従軍所々轉戦明治三十八年三月一日 清國盛京省奉天前戦□□□東北方砂山攻撃戦死	（右面）享保十八癸丑三月□六日　温泉本郷　上組世話人 調立主　子藏 （正面）前御代官井戸公正明図碑 泰雲院殿義哲良忠居士 （左面） 皆文政十一戊子五月謹立之　村役人山根周助　林　義助 同苗勇藏 安田農兵エ		（右面）大正九年一月日 （正面）中の關泰助之碑 （左面）湯里村有志及 世話方外一同	（右面）享保□季大歳　卯　季夏十五月　右ハ□□□みち 左ハ□□□みち （正面）一　蓮華縫 （左面） 為慈図□連奉各霊菩提也　再建立 清　白井儀右衛門	（正面） 副 遠 夷 験 験 國 本州銀山西偏歴西田郵至温泉津之途二十里矣其間山道嶮輩有□碾飯原之險二山相拒十里攝西田郵起其左右而□碾最難東阪上三里許絶頂界西田郵東偏西阪下五里及西田里居数軒纔斗峻届曲如回腸人在阪中者前者與後者相依如猿□相一貫緣高樹之顛然右稜磨牙木根振角重負而上者是如蹈鐵蒺藜足下礫礫其霜□碾蒐蕊阪名所由起也隊冬雨雪之沍祖暑燈熱之毒相歇為難行徒死凍馬牛斃藝飯原之阻亦比肩而起危途狹上者喘々依違而能行人出乎斯途其大息莫不懼畏矣鹿足郡大姓短悍德藤井孝義以事勤遇于此乃嘆然曰嗚呼矣凡行客涉于斯途貴者豪車輿賤者轎籃履及輿人馬牛駄員亦何隙遠奮然有奐険之志因納千金于　官以請開廻途之險之事皆文化丁卯春二月有　命始興工徒乃鬪乃鑿乃劃乃夷乃凋之繭者闇嵬水之潭者違焉石之大者劃之木細者発之出直澗狭高下左右因勢理之斗蛟者改矣□碾者足矣飯原之祖尋亦底績至秋七月上功住者議歌来者安歇亦長大息嘆功之偉矣今茲辛未夏漆奔騰薪道頗敢六月原　命就工越秋八月頃復前事云斯途難易所係西田是為最矣民之衷出西還日莫出入莫不何其徳乃欲誌二子之功徳勒一石于道左傳後之懐之者士豪渡利氏及森府人熊谷氏與有力焉遂與郵正里民謀之謁辭於余余亦嘗聞之嘉二子用財之道得其義且西田之民好善懐徳之厚因為之辭係日
□碾之山　□□崔薛　飯原之阻　□嵯斯難　嶽稜為冰　滄瀧為崖
徂厚之毒　馬牛逃遷　普矣富人　維人之彦
平途之貢　茲塹于官　□碾之石　定兮無蹇　飯原之危　藩兮且坦
縫者懸圃　過者□安　邏者懐徳　遊者禪賢　嵯彼逕人　理財不典
百巨之富　恕諸玄淵　後子孫哉　身俊能敢　生財有道　用之也寛
冥々積善　子孫誠遠
文化辛未冬十二月既望　本州　佐和□撰　男世魚書
（裏面）
庄屋　熊谷市郎兵衛直清
頭百姓　渡利覚五郎　定恒
百姓代　笠井茂左衛門　恒忠
工切　本州福光住　坪内伊平太　只氏作			1916		1811
1906	1828	1916	1916		1811
沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道	沖泊道

332	331	330	329	328	327	326	325	324	323	322	321	320	319	318	317
円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標
39	18	37.5	37	36	35	33	72	69	67	62	65	63	64	66	58
20	38	19	18.5	20.5	18.5	17	32.5	31	32	32	27	31.5	26.5	31	28
(正面)釋○○	(正面)妙法□□信士	(正面)釋□□	(正面)［　］女		(正面)○○ 釋 ○○○	(右面)明治廿七年 十二月十七日 (正面)○□□子	(正面)南無阿弥陀佛	(正面)○○氏先祖代々之墓	(正面)南無阿弥陀佛	(正面)南無阿弥陀佛	(正面)○○家先祖代々之墓	(正面)南無阿弥陀佛	(正面)□譽○○信士	(正面)南無阿弥陀佛	(正面)南無阿弥陀佛
						1894									
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

14図3	14図3	14図3		14図2									
69	68	67	66	65	64	340	339	338	337	336	335	334	333
香炉	石殿	地蔵	題目塔	題目塔	基礎	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標
		94		128.5	15	43	41.5	44.5	41	40	40	40	39
		62.5		53	43	21.5	24.5	22.5	21	21	20	19	18
(正面)施主○○トモ		(正面)明治廿七年十月再建 ］□		(右面)貞享三　蓮楽 丙 寅十月日 (正面)妙法蓮華経 (左面)一切衆生佛果言提妙貞	(右面)石工 理兵衛 (正面)大森下市 きくや □名 □□	(正面)○○○信士	(正面)釋□○○	(正面)○○○○居士 ○譽○○信女	(正面)○誉□□信士	(正面)釋○○	(正面)釋○○	(正面)○□童子	(正面)妙法　○○孩子
西田奥	西田奥	西田奥	降路坂	降路坂	降路坂	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	301
無縫塔	無縫塔	地蔵	地蔵	地蔵	地蔵	基礎	基礎	基礎	基礎	基礎	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	平頂方柱墓標	平頂方柱墓標	円頂方柱墓標
											66	60			57
											26.5	25			24.5
	(右面)寛政十一							(右面)宝暦五			(右面)明治二巳年 五月廿八日 (正面)□譽□○信士	(右面)明治五年 (正面)○誉○□信女	(正面)南無阿弥陀仏	(正面)南無阿弥陀仏	(右面)昭和五年四月九日[ ] (正面)○譽○○信女
													花崗岩	花崗岩	
	1799							1755			1869	1872			1872
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316
円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標
57	57	57	57	55	54	53	45	52	52	51	49.5	49	67	71
26	26	25	25	25	22	23	28	24	21	25.5	24	21.5	31	34
(正面)□譽○○○○居士	(正面)○譽○○信女	(正面)南無阿弥陀佛	(正面)○譽○○信女	(正面)釋○○	(正面)[ ]	(正面)○○院○[ ] 妙法 ○○○○[ ]		(正面)□□一處		(正面)[ ]○□○信士 妙法 ○○□○信女	(正面)釋□□	(正面)[ ]	(右面)大濱村長 関係人代表者 寺本寛三郎 吉村清治郎 油谷登三郎 岡 林太郎 (正面)南無阿弥陀佛	(正面)南無阿弥陀仏
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

					11図4	11図3				7図4	7図3	10図8	10図7
220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207
無縫塔	無縫塔	平頂方柱墓標	平頂方柱墓標	平頂方柱墓標	円頂方形墓標	題目塔	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	一石五輪塔	一石五輪塔	無縫塔	無縫塔
					106	76	64	58	66	29	29.5	81	105
					66	36	31	28	25	17.5	15.5	31	37
					18.5								
	(右面)万治三丙年	(右面)明治廿四年卯年三月二十日 俗名増平冂行年七十六才	(右面)西念寺「　」 孝主 (正面)宝永六丑天二月十九日 ○譽○○○○ 延享巳辰図六月 ○譽□○ ○○父	(右面)寶暦三□天 (正面)「　」子 (左面)十二月九日 ○○氏	(正面)南無阿弥陀仏	(正面)南無阿弥陀仏	(正面)南無阿弥陀仏	(正面)空　風　火	(正面)壬明治五年 施 ○○院○○○○居士 主 申二月廿七日				
										水地輪	水地輪欠 損		
		花崗岩	花崗岩	花崗岩									
	1829				1753	1709		1891	1660			1872	
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

236	235	234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221
無縫塔	無縫塔	組合せ宝篋印塔	地蔵	地蔵	地蔵	地蔵	地蔵	地蔵	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

8図2											8図9				
164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149
組合せ宝篋印塔	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標
65											40				
22											18				
	(右面) 天保八酉九月四日	(右面) 寛政六	(右面) 天保□	(右面) 天保八 (正面) 南無阿弥陀佛	(正面) 寛延四未辰 妙法 ○○童子 九月十日	(右面) 明治十九 (正面) □□信女 □□童子 □□□子	(右面) 安政二	(右面) 寛政四 (正面) 妙法 ○○信女	(右面) 文化十三 (正面) ○[ ]	(右面) 天保九	(右面) 文久二 (正面) 妙法 ○○信女	(右面) 文化九 (正面) 釈○□□	(右面) 享和三 (正面) ○[ ]	(右面) 天保七 (正面) ○○童子	(右面) 文政十一 (正面) ○○○○[ ]
相輪															
	1837	1794		1837	1751	1886	1855	1792	1830	1838	1862	1812	1803	1836	1828
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

10図6	10図5	10図4	10図3	8図4	8図3	7図18	7図17						
206	205	204	203	202	201	200-②	200-①	170	169	168	167	166	165
無縫塔	無縫塔	無縫塔	無縫塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	基壇	基壇	基壇	無縫塔	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔
67.5	90	71	79.5	18.8	18.3	20.5	50.7						
31	27	29	31.5	26	29.5	30.5	17.5						
	(基礎右面) 北海道函館[寺住職○○[師弟子法[道横令千[(基礎正面) ○○勧作三男安吉 行年十七才 (塔身正面) 遺骨ハ当家ノ 墓地ニアリ ○譽○○○法子												
				笠	笠	笠	相輪						
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

															10図2
132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	117
地蔵	円頂方形墓標	円頂方形墓標	地蔵	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	地蔵	無縫塔	円頂方形墓標	円頂方形墓標	地蔵	円頂方形墓標	地蔵	無縫塔
															66
															27
	(右面) 嘉永四	(右面) 文化十二		(右面) 明治五	(右面) 明治四十一 釈〇〇	(右面) 文政十一 釈〔　〕				(右面) 明治四			(右面) 安政二		
	1851	1815		1872	1908	1828				1871			1855		
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

		8図13					8図14					9図28	8図10		
148	147	146	145	144	143	142	141	140	138	137	136	135	134	133
地蔵	円頂方形墓標	円頂方形墓標	地蔵	円頂方形墓標	円頂方形墓標	地蔵	円頂方形墓標	円頂方形墓標	地蔵	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標
		34					24				34	32	34	
		18					18				19	16	19	
	(右面) 天保五子 七月二十一日 (正面) 釈〇〔　〕			(右面) 享和三	(右面) 宝暦二		(右面) 明治十二年卯 五月廿八日 (正面) 〇〇童女 (左面) 〇〇喜十嬢 〔　〕	(右面) 明治九		(右面) 明治卅六	(右面) 文久三	(右面) 嘉永四 〔　〕 (正面) 釈〇〇□ (左面) 浅平〔　〕 浅一図	(右面) 明治卅六 (正面) 釈〇〇	(右面) 文政十一
	1832	1834		1803	1752		1879	1876		1903	1863	1851	1903	1828
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

9図22	8図18	9図10	9図20					9図21	8図17	9図19		9図27	9図16
100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87
円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標
38	32	39	40					38	34	38		33	39
22	18	19	18					17	18	21		15	20
(右面)明和元甲申	(右面)寛政三年 二月廿五日 (左面)〇〇童女	(正面)天保八酉 六月二日	(右面)明治十六 (正面)〇誉□□	(右面)明治十一		(右面)慶応二		(右面)天保十一[　] 正月 (正面)〇〇	(右面)天保十一六月 (左面)〇〇□	(右面)文化二 [　] (正面)[　] (左面)天[　] [　]	(右面)明治廿一	(右面)明治廿三 十二月[　] (正面)釈〇〇□ (左面)〇増次[　] 俗名[　]	(右面)弘化二乙巳年 七月九日 (正面)釈〇□ (左面)俗名〇〇屋弥七 □□□□
1764	1791	1837	1883	1878		1866		1840	1840	1805	1888	1890	1845
極楽寺	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**

10図1												8図16	8図11	8図12	
116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101
無縫塔	地蔵	地蔵	地蔵	地蔵	地蔵	地蔵	地蔵	地蔵	地蔵	花生	水受け	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標
75.5												48	54	52	
23												22	23	21	
(正面)嘉永二酉年 八月十二日 嘗山廿三世 常ヨ上人弟子			(右面)宝暦十二			(右面)天明六						(右面)宝暦十三未	(右面)文化三 二月[　]	(右面)安永五申天	(右面)明治十二
1849			1762			1786						1763	1806	1776	1879
極楽寺	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**	**極楽寺**

70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55
円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標
		(右面) 明治三						(右面) 明治十三		(右面) 享和三	(右面) 文化十			(右面) 天保五	
		1870						1880		1803	1813			1834	
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

9図26		9図2													
86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71
円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標
33		48													
18		21													
(右面) 天保六乙未 (左面) 十二月 [ ]	(右面) 大正十二	(右面) 天保八 [ ] (正面) 妙 [ ]			(右面) 享和二						(右面) 天保十	(右面) 享和四			(右面) 天保十一
1835	1923	1837			1802						1839	1804			1840
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

8図1	7図13	7図12	9図11	9図24	9図23	8図6	8図7	9図25		8図19	8図5	9図5	9図13	9図12	9図1
38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23
組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔	一石宝篋印塔	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標		円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標
56	40	87.5	42	32	36.5	74	58	32.5		54	54	47.5	43	43	54
30	31	30	22	22	27	27	24	20		24	22.5	23	22	23	24
											(右面)嘉永二年酉年四月	(正面)○誉○○信女 ○○○○信女 (左面)明治 ○○ソヨ	(正面)釋□	(正面)本[	
相輪・笠															
											1849				
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

												11図2		7図11	7図16
54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39
円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	基壇	基壇	題目塔	石碑	組合せ宝篋印塔	組合せ宝篋印塔
												54		59.5	102
												33		30	35
		(右面)寛政四	(右面)弘化三	(右面)弘化元	(右面)明治七	(右面)嘉永六	(右面)明和七	(右面)嘉永二	(右面)文化十			(正面)]阿弥陀佛			
												緑色		塔身・基礎欠損	塔身欠損
		1792	1846	1844	1874	1853	1770	1849	1813						
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺

挿図番号	整理番号	種別	全高	最大幅	墓標幅	銘文	備考	西暦	所在
9図7	10	円頂方柱墓標	45	21.5		(正面)南無阿弥陀佛			極楽寺
9図3	9	円頂方柱墓標	49	21		(正面)妙法　○○院○○信女			極楽寺
9図15	8	円頂方柱墓標	36	19		(正面)釋○○			極楽寺
7図2	7	一石五輪塔	45	19			空風輪欠損		極楽寺
7図9	6-②	組合せ宝篋印塔	21	24			基礎		極楽寺
7図9	6-①	一石宝篋印塔	49	19			相輪欠損		極楽寺
7図10	5-②	一石宝篋印塔	61	23.5			相輪欠損		極楽寺
7図10	5-①	基壇	11	30			反花座		極楽寺
7図14・15	4	組合せ宝篋印塔	93	28			塔身欠損		極楽寺
7図6	3-②	組合せ宝篋印塔	25	28			基礎		極楽寺
7図6	3-①	一石宝篋印塔	59	25			相輪欠損		極楽寺
8図5下	2-②	組合せ宝篋印塔	46	40		(左面)○○[　]母 (正面)□ ○誉[　]□ 六月□	基礎		極楽寺
8図5上	2-①	組合せ宝篋印塔	35	27		(正面)明□四[　] □誉○○○法善□ □月[　]日	基礎		極楽寺
11図1	1	舟形光背墓標	106	58	39		福光石か		極楽寺

挿図番号	整理番号	種別	全高	最大幅	墓標幅	銘文	備考	西暦	所在
8図8	22	円頂方形墓標	56	25		(右面)昭和四年九月二十八日 ○○利三郎了 昭和四年九月二十七日 ○○ケワ了			極楽寺
9図4	21	円頂方柱墓標	49	24		(右面)明治十九□十二月卅一日 (正面)釋○□信女			極楽寺
7図5	20	一石宝篋印塔	58.5	23.5		(正面)于時慶長十四天 施主 右為○○信女也 四月廿五日敬白	相輪欠損	1609	極楽寺
7図7	19	一石宝篋印塔	65.5	24			相輪欠損		極楽寺
7図1	18	一石五輪塔	56	21			空風輪欠損		極楽寺
7図8	17	一石宝篋印塔	64	26.5		(基礎正面)万治二天 施主 為□譽○○信士霊 敬 (塔身正面)妙 七月十日	相輪欠損	1659	極楽寺
9図9	16	円頂方柱墓標	44	18		(正面)○譽○○	福光石		極楽寺
9図14	15	円頂方柱墓標	42	20		(右面)明□□□ □□□□ (正面)釋○○ (左面)初□良長男 俗□□□□ □□□□□	福光石		極楽寺
9図6	14	円頂方柱墓標	47.5	22.5					極楽寺
9図18	13	円頂方柱墓標	39.5	20		(正面)□○□女 □○□子 ○○○子 ○○○○女			極楽寺
9図17	12	円頂方柱墓標	38	19		(正面)釈○○			極楽寺
9図8	11	円頂方柱墓標	46	23		(右面)文政十丁亥 八月十二日 (左面)○○屋重兵ヱ女 俗名福助 行年九十三		1827	極楽寺

報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさほうこくしょ		
書名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
副書名	極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区		
巻次			
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書		
シリーズ番号	11		
編執筆者	田中義昭・池上　悟・林　健亮・新川　隆・守岡正司・中木紗友美		
編集機関	島根県教育委員会・大田市教育委員会		
所在地	〒690-8502　島根県松江市殿町１番地　TEL０８５２－２２－５６４２ 〒694-0064　島根県大田市大田町大田ロ1111番地　TEL０８５４－８２－１６００		
発行機関	島根県教育委員会		
発行年月	2011年3月		
調査原因	石見銀山遺跡総合調査		
極楽寺墓地	所在地	主な時代	石造物
	大田市 温泉津町	江戸 ～ 近代	一石宝篋印塔・一石五輪塔・組合宝篋印塔・組合五輪塔・無縫塔・円頂方形墓標・円頂方柱墓標・平頂方形墓標・地蔵・舟形光背墓標
石銀地区	大田市 大森町	戦国～江戸	一石宝篋印塔・一石五輪塔・組合宝篋印塔・六角柱墓標
温泉津沖泊道周辺	大田市 温泉津町・ 大森町	戦国～江戸	一石宝篋印塔・一石五輪塔・組合宝篋印塔・円頂方形墓標・道標・題目塔・舟形光背墓標

石見銀山
極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区

平成23（2011）年3月

編　集　島根県教育委員会・大田市教育委員会
松江市殿町1番地　大田市大田町大田ロ1111番地

発　行　島根県教育委員会
松江市殿町1番地

URL　http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami_ginzan/

印　刷　渡部印刷株式会社